

令和5年度看護研究交流センター

# 活動報告書

令和6年6月



公立大学法人新潟県立看護大学

看護研究交流センター

## 巻頭言

桜の満開とともに、木々の芽吹きが眩しい季節となりました。今年は、春の訪れが早いのかと思いきや、桜の開花は昨年より10日ほど遅れ、自然の営みはこちらの思い通りにはいかないのだと改めて実感しています。

さて、令和5年度の看護研究交流センターの取り組みを振り返りますと、まずは、令和5年10月に「専門性の高い看護職育成部門」が発足したことが挙げられます。この部門が発足した経緯を簡単に説明しますと、新潟県が2019年に専門性の高い看護職育成検討会を設置し、本学がその委託先となりました。2020年3月に「専門性の高い看護職員の育成検討会報告書」をとりまとめ、そこには、新潟県において専門看護師や認定看護師などの専門性の高い看護職員の育成を、行政や看護協会、県内看護系大学、医療機関等の関係機関が連携して育成していく必要があると提言されています。この提言の実装化に向け、新潟県及び新潟県看護協会から、本学に対し協力要請があり、本学にてこれを担う組織として「専門性の高い看護職育成部門」を看護研究交流センター内に設置することとなりました。この部門の主な活動内容は、「上越圏域看護部長会の活動支援」、「専門看護師のネットワーク支援」の2つとなります。発足から半年の間に、部門員及び関係者の方々のご協力により、上記2つの活動を進めることができました。改めて感謝いたします。活動の詳細は、当部門の活動報告をご覧になっていただければと思います。

また、「地域社会貢献部門」、「看護職学習支援部門」、「地域課題研究開発部門」の3部門における活動についても、皆様のご協力のもと全ての企画を無事に実施することができました。重ねてお礼申し上げます。

令和6年度は、さらに各部門の活動が実りある成果を得られるよう、引き続き皆様のご意見を賜りながら、柔軟に対応してまいります。

今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

令和6年4月吉日

看護研究交流センター長 岡村典子

# 令和5年度看護研究交流センター 活動報告書

## 目 次

### I. 事業実施報告

事業概要	4
事業費	7
公開講座及び参加者数一覧	9
事業広報活動	10

### II. 部門報告

地域社会貢献部門	14
看護職学習支援部門	22
地域課題研究開発部門	30
特別研究部門	34
専門性の高い看護職育成部門	35

### III. 事務局報告

出前講座	38
------	----

### IV. 地域課題研究助成費の報告

2022年度(2021年度を含む)地域課題研究	44
-------------------------	----

# I . 事業実施報告

## 事 業 概 要

新潟県立看護大学では、大学と地域の交流の場として「看護研究交流センター」を平成14年4月に開設しました。

大学の建学の精神である「ゆうゆう・くらしづくり」に基づき、大学の教育・研究の成果を地域へ提供し、活動を通じて地域と大学が共に成長していくための橋渡しを担っています。

令和5年10月に、新しく「専門性の高い看護職育成部門」が加わり5部門となりました。地域の皆様からの要望をもとに、5つの部門の活動を柱にして、大学の教職員が情報を発信しています。

### I 目的

看護研究交流センターは、看護科学における教育と研究の成果を地域に還元し、県民及び保健医療福祉関係者に対する学術支援ならびに生涯学習・研修支援活動を通して、県内の保健・医療・福祉の向上に貢献することを目的としています。

### II 各部門の主な活動内容

#### 1. 地域社会貢献部門【いきいきサロン】【看護大・上教大連携公開講座】

地域の医療者・大学と地域住民の交流会である「いきいきサロン」と「上越教育大学との連携公開講座」を開催し、地域住民への学習の機会を提供している。

#### 2. 看護職学習支援部門【看護職学習支援公開講座】【バーチャルカレッジ】

現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を主体に、県内の看護職への学び直しの機会を提供している。

#### 3. 地域課題研究開発部門

##### 【地域課題研究公募】【地域課題研究発表会】【上越地域看護研究発表会】

県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に本学教員と共同で行う研究を公募し、その成果報告会となる地域課題研究発表会や、上越地域の看護研究の発表の場である上越地域看護研究発表会の開催(上越地域振興局健康福祉環境部と共催)を担っている。

#### 4. 特別研究部門

一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することを目的に、県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取り組んでいる。

#### 5. 専門性の高い看護職育成部門

専門性の高い看護職員の育成に向け、令和5年10月に発足した。初年度は、上越圏域における専門性の高い看護職員の育成と定着を図るため、上越圏域看護部長会の活動支援を行うほか、新潟県看護協会と連携して「専門看護師フォローアップ研修」を開催した。

### III 事務局

#### 【出前講座】

本学教員の研究成果を地域へ還元する地域貢献活動の一環として実施している。

#### 【卒業生支援】

卒業生支援事業として、相談窓口の開設、小規模会合に対する助成を行っている。

IV 令和5年度 看護研究交流センター構成員

区 分	氏 名	職 名
	センター長 岡村典子	基礎看護学教授
地域社会貢献部門	部門長 山田恵子	小児看護学准教授
	永吉雅人	情報科学准教授
	西川美樹	母性看護学・助産学准教授
	相澤達也	成人看護学助教
	八巻ちひろ	母性看護学・助産学講師
	伊藤美由紀	母性看護学・助産学助教
	小林宏至	小児看護学助教
	山田彩乃	基礎看護学助手
	五十畑麻奈美	母性看護学・助産学助手
	野村優希	地域看護学助手
佐藤咲子	成人看護学助手	
看護職学習支援部門	部門長 伊豆上智子	看護管理学教授
	小林綾子	成人看護学准教授
	船山健二	精神看護学講師
	前川絵里子	地域看護学講師
	上田 恵	母性看護学・助産学助教
	小林宏至	小児看護学助教
	池田よし江	成人看護学助教
	山田彩乃	基礎看護学助手
	佐藤咲子	成人看護学助手
地域課題研究開発部門	部門長 樺澤三奈子	成人看護学准教授
	佐々木三和	精神看護学准教授
	石原千晶	成人看護学講師
	安達寛人	精神看護学講師
	早藤夕子	精神看護学助教
	金井香織	老年看護学助教
	五十畑麻奈美	母性看護学・助産学助手
	野村優希	地域看護学助手

区 分	氏 名	職 名
特別研究部門	部門長 岡 村 典 子	基礎看護学教授
	伊 豆 上 智 子	看護管理学教授
	山 田 恵 子	小児看護学准教授
	権 澤 三 奈 子	成人看護学准教授
	大 竹 順 司	事 務 局 長
	丸 山 紀 子	看護専門職員
センター事務局	丸 山 紀 子	看護専門職員
	岸 田 友 希	事 務 職 員
	虎 石 和 代	事 務 職 員

## 事業費

令和5年度予算配分額 4,803,000円

### I 各部門配分額 (単位：円)

地域社会貢献部門	282,000
看護職学習支援部門	220,000
地域課題研究開発部門	937,000
特別研究部門	205,000
小計	1,644,000

### II-1 地域課題研究【2022年度研究】(前年度繰越) [1.~8.研究代表者(所属)]

1. 武田 一久 (医療社団法人渡辺内科医院)	59,335
2. 関 真和 (長岡赤十字病院)	61,722
3. 桑原 香菜子 (長岡赤十字病院)	79,735
4. 米持 純子 (新潟県立中央病院)	83,408
5. 吉村 登紀恵 (新潟労災病院)	98,713
6. 高橋 恵美 (厚生連上越総合病院)	68,500
7. 皆川 みどり (長岡赤十字病院)	12,420
8. 佐藤 暁 (さいがた医療センター)	22,230
小計	486,063

### II-2 地域課題研究【2023年度研究】 [1.~.研究代表者(所属)]

1. 大澤 寿子 (新潟県立柿崎病院)	100,000
2. 佐藤 七重 (豊栄病院豊栄訪問看護ステーション)	100,000
3. 志賀 木綿子 (総合リハビリテーションセンターみどり病院)	100,000
4. 瀧澤 いずみ (新潟信愛病院)	100,000
5. 外川 友子 (長岡赤十字病院)	100,000
6. 箕輪 明美 (長岡赤十字病院)	100,000
7. 柳澤 美直代 (藤田企画グループホーム癒しの家)	100,000
小計	700,000



Ⅲ その他

事務局管理費	1,972,937
合計	4,803,000

令和5年度 看護研究交流センター公開講座実施報告

	日時	講座名	テーマ	参加者数
1	5月18日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	認知症のある生活に備える	140
2	5月20日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ①「看護研究のテーマをみつけよう」	36
3	6月15日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	アレルギーについて ～食物アレルギー、アナフィラキシー～	97
4	6月17日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ②「看護研究方法の理解」	36
5	7月8日(土) 13:30～15:30	看護大・上教大 連携公開講座	自分らしく、すこやかに生きるコツ	97
6	7月20日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	眼精疲労の原因・症状・予防+進化する眼科治療	129
7	7月29日(土) 13:00～16:00	看護職学習支援 公開講座	さあはじめよう看護研究 ④「研究計画書の書き方」	22
8	9月9日(土) 13:30～15:30	看護職学習支援 公開講座	何か変！院内急変時の対応力を磨く—急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応—	46
9	9月21日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	華麗なる加齢を目指そう！女性だけでなく男性にも起こる更年期障害について	82
10	9月30日(土) 13:30～15:30	看護職学習支援 公開講座	高齢者のエンド・オブ・ライフケア	39
11	10月14日(土) 13:00～16:00	看護研究発表会	2023 第13回 上越地域看護研究発表会 (上越地域振興局健康福祉環境部共催)	124
			2023年度 地域課題研究発表会 (2022年度研究)	
12	10月19日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	脳の構造と機能から考える「インターネット・ゲーム障害」	84
13	11月11日(土) 13:30～15:30	看護職学習支援 公開講座	看護師のためのセルフコンパッション —自身を癒し・労り・安らぐ—	2
14	11月16日(木) 18:30～19:30	いきいきサロン	ストレスマネジメント	110
			いきいきサロン 6回	642
			看護職学習支援公開講座 6回	181
			看護大・上教大連携公開講座 1回	97
			研究発表会 1回	124
			合計 15回	1,044

## 事業広報活動

### I 情報公開

情報公開についての活動は以下のとおりである。

1. 令和4年度看護研究交流センター活動報告書：令和5年5月発行
2. 2023年度看護研究交流センターガイドブック：3,000部
3. 2023年度看護研究交流センター出前講座(パンフレット)：1,500部
4. 看護研究交流センター ホームページ
5. いきいき県民カレッジ：平成26年度より看護研究交流センターの公開講座を登録  
(※看護職学習支援公開講座を除く)

### II 広報活動

広報誌、新聞、ラジオ等における広報目的の掲載は以下のとおりである。

1. 地域社会貢献部門『看護大・上教大連携公開講座』(8回)

講座名	記事掲載・放送
『看護大・上教大連携公開講座』 自分らしく、すこやかに生きるコツ	上越タイムス(6/20), 新潟日報おはよう通信(6/9, 6/18, 6/23), 上越ASAニュース(6/21, 6/27), 上越よみうり伝言板(6/22, 6/24)

2. 地域社会貢献部門『いきいきサロン』(38回)

講座名	記事掲載・放送
年間概要	上越タイムス(4/18)
【第1回】 認知症のある生活に備える	有線放送内お知らせ(4/14～), JCV MJ インフォメーション(4/29～5/12), 上越タイムス(4/18), 上越ASAニュース(4/20, 5/12), 上越よみうり伝言板(4/25, 4/27), 新潟日報おはよう通信(5/2)
【第2回】 アレルギーについて ～食物アレルギー、アナフィラキシー～	有線放送内お知らせ(5/12～), JCV MJ インフォメーション(5/27～6/9), 上越タイムス(5/2), 上越よみうり伝言板(5/2), 新潟日報おはよう通信(5/19)
【第3回】 眼精疲労の原因・症状・予防 +進化する眼科治療	有線放送内お知らせ(6/9～), JCV MJ インフォメーション(6/17～6/30), 上越タイムス(6/13), 新潟日報おはよう通信(6/23)
【第4回】 華麗なる加齢を目指そう！ 女性だけでなく男性にも起こる更年期障害 について	有線放送内お知らせ(8/11～), JCV MJ インフォメーション(8/26～9/1), 上越タイムス(8/22), 上越よみうり(8/29), 新潟日報おはよう通信(8/23), 上越ASAニュース(8/25)

講座名	記事掲載・放送
【第5回】 脳の構造と機能から考える 「インターネット・ゲーム障害」	有線放送内お知らせ(9/15～), JCV MJ インフォメーション(10/7～10/13), 上越よみうり(10/3, 10/9), 新潟日報おはよう通信(10/17)
【第6回】 ストレスマネジメント	有線放送内お知らせ(10/13～), JCV MJ インフォメーション(10/28～11/10), 上越タイムス(10/17), 上越よみうり(11/2, 11/4, 11/7, 11/9), 上越 ASA ニュース(10/20), 新潟日報おはよう通(10/24)

### 3. 看護職学習支援部門『看護職学習支援公開講座』(2回)

講座名	記事掲載・放送
①～③予定	新潟日報(5/7)
さあはじめよう看護研究① 「看護研究のテーマをみつけよう」	
さあはじめよう看護研究② 「看護研究方法の理解」	
さあはじめよう看護研究③ 「研究計画書の書き方」	
④～⑥予定	新潟日報(8/6)
④何か変！院内急変時の対応力を磨く －急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応－	
⑤高齢者のエンドオブライフケア	
⑥看護師のためのセルフコンパッション －自身を癒し・労り・安らぐ－	

### 4. 地域課題研究開発部門(2回)

発表会名	記事掲載・放送
2023 年上越地域看護研究発表会 及び 2023 年地域課題研究発表会 (2022 年度研究報告)	上越よみうり(9/21, 26)

### 5. 事務局(2回)

講座名	記事掲載・放送
出前講座	上越タイムス(3/21, 4/14)

## III 記事掲載・放送

新聞、放送等における取材は以下のとおりである。

### 1. 地域社会貢献部門『いきいきサロン』(1回)

講座名	記事掲載・放送
【第6回】 ストレスマネジメント	上越タイムス(11/20)

2. 地域課題研究開発部門(1回)

発表会名	記事掲載・放送
2023年第13回上越地域看護研究発表会 2023年(2022年度)研究地域課題研究発表会	上越タイムス(10/17)

3. 事務局(1回)

講座名	記事掲載・放送
出前講座	上越タイムス(12/20)

## II. 部門報告

## 地域社会貢献部門

山田恵子、永吉雅人、西川美樹、八巻ちひろ、相澤達也、伊藤美由紀、小林宏至、  
山田彩乃、五十畑麻奈美、野村優希、佐藤咲子、丸山紀子

### I 本部門の事業目的

地域社会貢献部門では、地域住民の方々が気軽に大学に足を運び、健康について関心を寄せ、学び合う場を目指す「看護大いきいきサロン」を平成21年度から開催している。また、今年度より、看護大・上教大連携公開講座についても本部門で担当することとなった。

### II 事業の概要

#### 1. 「看護大いきいきサロン」開催状況

今年度は、コロナ禍が明けたものの、病院実習などに出向く看護大学という特徴から、マスク着用を基本として、事前申込制にて定員100名として開催した。コロナ禍が明けた影響が120名以上となった回もあり、盛況のうちに終了した。

令和5年度の参加者数は642人であり、平成21年度から開始して以降、いきいきサロンの総参加者数は8,475人となった。

表1 開催日時およびテーマ・講師と参加人数

回	開催日	テーマ	講師	参加人数
第1回	R5年5月18日 (木)	認知症のある生活に備える	原等子先生（新潟県立看護大学老年看護学 准教授）	140名
第2回	R5年6月15日 (木)	アレルギーについて～食物アレルギー、アナフィラキシー	額賀愛先生（けいなん総合病院 小児科 医師）	97名
第3回	R5年7月20日 (木)	眼精疲労の原因・症状・予防+進化する眼科治療	石田誠夫先生（石田眼科医院 院長）	129名
第4回	R5年9月21日 (木)	華麗なる加齢を目指そう！女性だけではなく男性にも起こる更年期障害	西川美樹先生（新潟県立看護大学母性看護学 准教授）	82名
第5回	R5年10月19日 (木)	脳の構造と機能から考える「インターネット・ゲーム障害」	堀江正男先生（新潟県立看護大学生物・医学 教授）	84名
第6回	R4年11月16日 (木)	ストレスマネジメント	野村照幸（さいがた医療センター 主任心理療法士）	110名

## 2. 参加者のアンケート結果

### 1) 参加者の年代

70歳代が201人(34%)と最も多く、次いで60歳代が173人(29%)、50歳代103人(17%)であった。

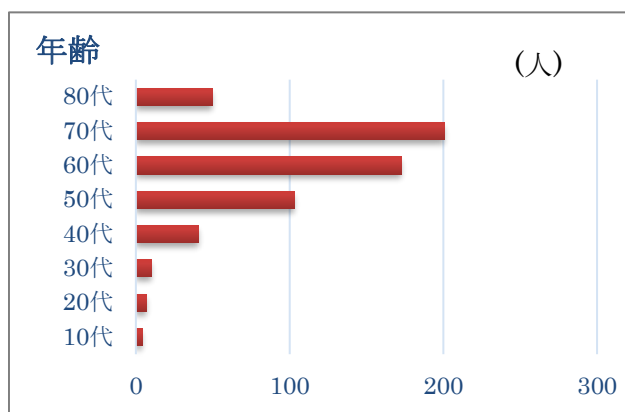


図1 年代

### 2) これまで参加した回数

これまでに「10回以上」参加と「2~3回」参加した人が199人(34%)と同数だった。「初めて」が105人(18%)、「4~10回」参加した人が82人(14%)の順であった。

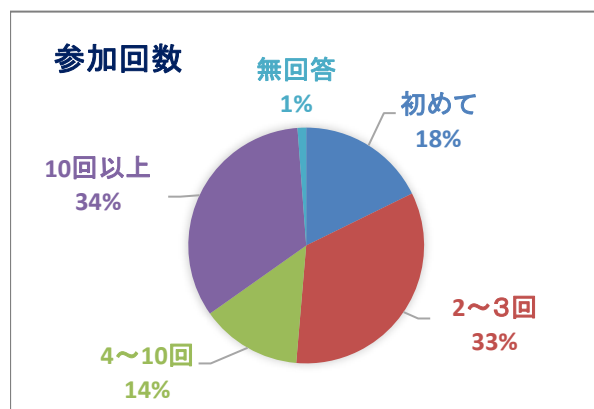


図2 参加回数

### 3) 周知方法 (複数回答)

「知人友人」によって参加した人が121人(32%)と最も多く、次いで「前回の案内」によって参加した人が74人(21%)、「チラシ」61人(16%)、「有線」39人(10%)の順であった。

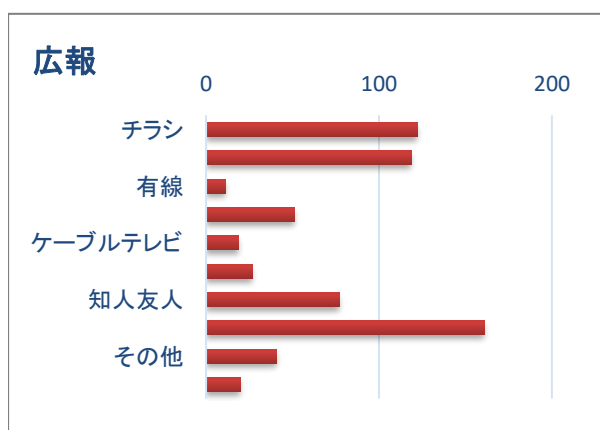


図3 周知方法 (複数回答) (人)



4) 参加理由（複数回答）

参加理由では、「テーマに興味・関心があったから」が420人（48%）と最も多く、「毎回参加しているから」が122人（18%）、次いで「講師の話が聞きたかったから」144人（17%）であった。  
「健康のため」が121人（16%）であった。

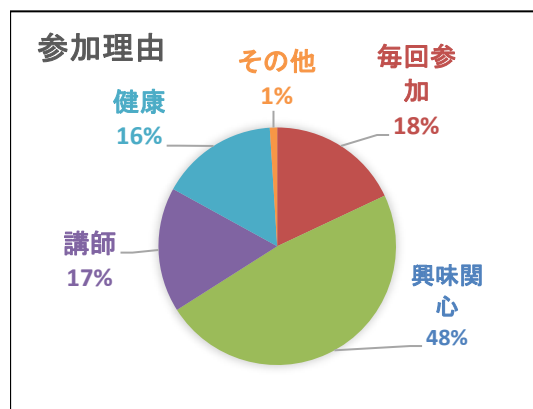


図4 参加理由（複数回答） (ウ)

5) 講師の話についての感想

全体では、「非常に良かった」と回答した人は317人（54%）、「良かった」と回答した人は195人（33%）であり、全体の9割を占めた。

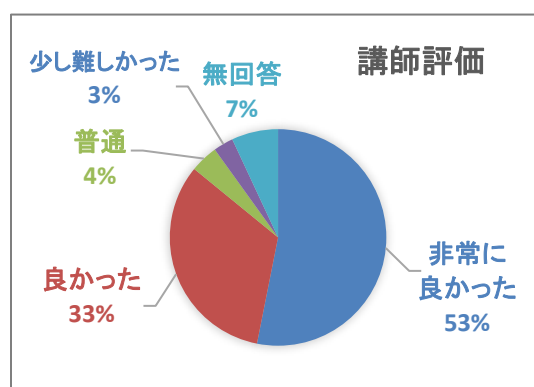


図5 講師の話についての感想 (ウ)

6) 今後、とりあげてほしいテーマ（複数回答）

多かった項目は、「ストレス」が142人と最も多く、次いで「認知症」139人、「肩こり、腰痛」130人、「生活習慣病」127人の順に多かった。その他の自由記載には、帯状疱疹、重粒子治療、フレイル、マイノリティーなど最近の話題となるテーマがあげられていた。

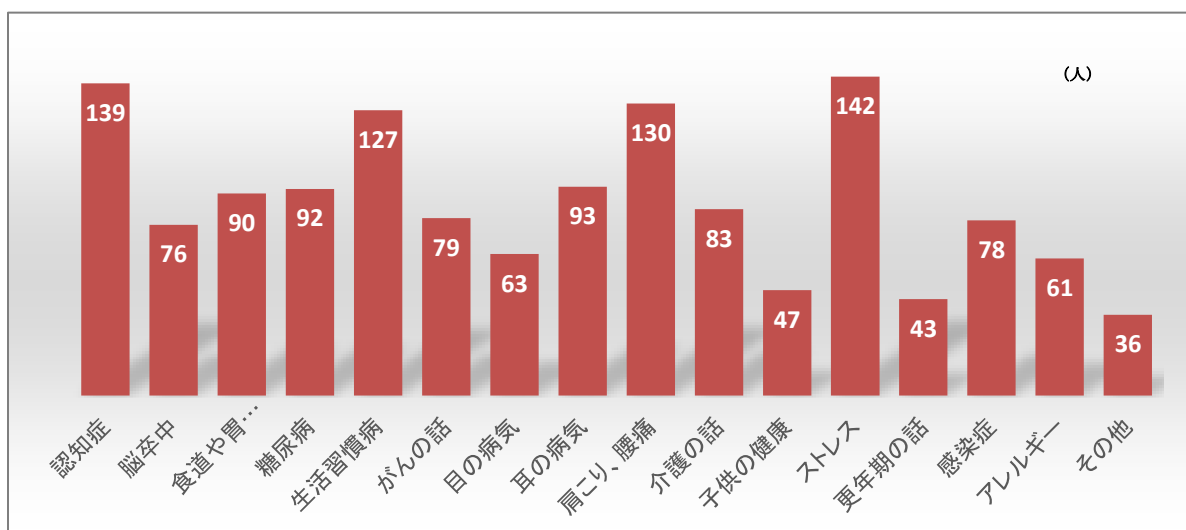


図6 今後とりあげてほしいテーマ（複数回答） 回収数 1379

### 3. 企画および運営

#### 1) 企画実行メンバー

地域社会貢献部門のメンバー12名が企画から運営までを行った。チラシの作成・発送、新聞広告への掲載依頼、講師資料の印刷等は看護研究交流センター事務局が行った。

また、当日の運営では学生アルバイト4名が会場準備や受付・参加者の誘導を行った。

#### 2) 広報活動

看護研究交流センターの案内、リーフレットの発送、看護大いきいきサロン通信の発行(2回)、講座のチラシの作成と配布、大学ホームページでの情報公開、NICかわら版、上越よみうり、上越ASAニュースへの掲載、事前収録による有線放送、上越ケーブルビジョン(JCV)のPRコーナーの活用を行った。

#### 3) 講師謝礼

学外の講師には1回1万円および交通費を支払った。

#### 4) 参加者への対応

新型コロナウイルス感染防止対策として、事前申込制とマスク着用を継続し、体温測定や手指消毒については強制せず、必要時実施することとした。

資料については、昨年同様、看護研究交流センターのロゴマークがついたクリアファイルに入れて配布した。

本講座は、新潟県の「いきいき県民カレッジ登録講座」に登録されており、希望者には手帳の配布を行ったが、上記登録は今年度をもって終了となった。

### 4. 看護大・上教大連携公開講座

本講座は、新潟県立看護大学と上越教育大学が、協定に基づき(平成22年7月2日:上越教育大学と新潟県立看護大学との包括的な連携・協力に関する協定)、地域社会に貢献することを目的として、お互いの大学が持つ資源を活用して公開講座を開催する。

今年度は、当番校である新潟県立看護大学において開催した。メインテーマは、「自分らしく、すこやかに生きるコツ」として、本学から2名の講師、上教大から1名の講師に登壇いただいた。本学からは、母性看護学・助産学領域の常磐洋子教授より「加齢に自分らしく、イキイキとこころを輝かせるために!知っておきたい!こころが元気になるお産のはなし」、精神看護学の舩山健二講師より「よく耳にする言葉から、その生きにくさ/生きづらさに気づきあう」、上越教育大学からは、学校保健・予防医学領域の池川茂樹准教授より“自分らしい”運動って何?~健康づくりに必要な運動の要件~」について講演いただいた。

参加者は、97名であり、70歳代が42.4%と最も多く、次いで60歳代、50歳代、80歳代であった。20歳~30歳代の参加は残念ながら5.0%に満たなかった。

住居は、上越市が83.7%、妙高市と糸魚川市が12.0%であった。講座の参加理由は、興味・関心のあるテーマだったが最も多く、講師の話しは、非常に良かった、良かったが84.1%と

大変、満足感の高い結果であった。

## 5. 令和5年度の評価と今後の課題

### 1) 看護大いきいきサロン

「看護大いきいきサロン」については、令和5年度の参加人数は、令和4年度よりも157人増加し642人（平均107人/回）であった。今年度の特徴は、初めて及び2から3回目の参加者が100名以上増え、また40歳から60歳までの参加者が100名程度増えたことである。

新規の参加者を増やしていけるようなテーマ設定に努力したい。今年度は、第3回「眼精疲労の原因・症状・予防+進化する眼科治療」が大変好評であった。白内障や緑内障の最新治療について、実際の診療を踏まえて、薬物治療から手術療法まで歴史的な治療の変遷から今日の治療まで細かく解説いただいた。眼精疲労を含む、ドライアイや白内障、緑内障などについては、地域の方にとって大変関心のあるテーマであり、長年地域で診療されている医師からの講演は、多くの参加者の満足の高い講座となった。

今後の課題としては、感染症対策については、引き続き対策を続け、周囲の感染状況を見極め、開催を決定していく。参加者アンケートを参考に、テーマや講師の検討をしていく。

### 2) 看護大・上教大連携講座

「看護大・上教大連携講座」については、令和5年度の開催は、新潟県立看護大学で行われた。開催日時は、令和5年7月8日(土)13:30~15:30(2時間)であり、97名と概ね良好な参加人数であった。また、60-70歳代の参加者7割と多いものの、20歳代-50歳代の参加者も2割程度、80歳代の参加者も1割程度あり、若者世代から高齢者までの幅広い年齢の参加者であった。今年度の連携講座は、3年ぶりにメインテーマを「自分らしく、すこやかに生きるコツ」と変更し、幅広い年齢の参加者に来ていただくことを目的とした。年度中に2回のオンライン会議を実施し、令和6年度も引き続き、同様のメインテーマとして、上教大から2名の講師、看護大学から1名の講師を依頼することを確認した。

令和6年度 看護大・上教大連携講座

幹事校 上越教育大学

日程 令和6年7月13日(土)13:30-15:30(2時間)

テーマ 「自分らしく、すこやかに生きるコツ」

講師 上越教育大学 池川茂樹 先生

上越教育大学 留目宏美 先生

新潟県立看護大学 小長谷百絵 先生

今後の課題としては、次年度は上教大が当番校であるため、担当講師の調整および上教大の関係者と会議を持ち運営を進めていく。

<令和5年度 いきいきサロンの様子>



第1回



第2回



第3回



第4回



第5回



第6回

<令和5年度 看護大・上教大連携講座の様子>





「いきいきサロン」は、健康に関心のある**地域の皆様と、**  
**看護や医療等の専門家との交流の場**として、平成21年度から開催してきました。  
 今回の通信では先日開催した第1回～第2回の内容と、第3回以降の予定をご紹介します。  
 今後も皆様からのご要望や、健康に関する世の中の動き等に合わせ  
**いきいきと生活していく**ことを応援するテーマを準備しお待ちしております。

**第1回 5月18日**

**認知症のある生活に備える**



新潟県立看護大学  
 老年看護学 准教授  
 原 等子 先生

本年度初回のサロンは、140名ととても多くの方にご参加いただきました。みなさまからのアンケートでは『とってもあったかいお話をありがとうございました』『認知症になったらと不安でいっぱいでしたが、原先生の話聞き、考え方が変わりました。』といった嬉しいお声をたくさんいただきました。

**第2回 6月15日**

**アレルギーについて**  
 ～食物アレルギー、アナフィラキシー～



けいなん総合病院  
 小児科医師  
 額賀 愛 先生

本年度2回目は、97名の方にご参加いただきました。練習用のエピペンに触れて、体験していただけるようなご講義でした。アンケートでは『とても見やすい資料、ゆっくりはっきりとしたお話で、大変わかりやすかった』『エピペンの練習ができて本当に良かったです』といったお声をいただきました。

【今後のいきいきサロン】各回 18:30～19:30 本学ホールにて ※事前申込制、参加費無料

日時	講師	テーマ
7/20(木)	石田眼科病院 院長 石田 誠夫先生	眼精疲労の原因・症状・予防+進化する眼科治療
9/21(木)	母性看護学・助産学講師 西川 美樹 先生	華麗なる加齢を目指そう！女性だけではなく男性にも起こる更年期障害について
10/19(木)	生物・医学 教授 堀江 正男 先生	脳の構造と機能から考える「インターネット・ゲーム障害」
11/16(木)	さいがた医療センター 主任心理療法士 野村 照幸先生	ストレスマネジメント

# 看護大 いきいき サロン通信



「いきいきサロン」は、健康に関心のある地域の皆様と看護や健康等の専門家との交流の場として全6回を予定し、皆様からのご協力をいただきながら現在第4回までの講座を終了いたしました。本号では、第3回と第4回の開催報告と、今後の予定についてお知らせいたします。

今後も皆様からのご要望や健康に関する世の中の動き等を参考にしながら、いきいきと生活していくことを応援するテーマを準備し、皆様をお待ちしております。今年度最後の第6回いきいきサロンへ是非ご参加ください。

第14巻 第2号 2023年10月19日

## 第3回 7月20日

眼精疲労の原因・症状・予防  
+進化する眼科治療

石田眼科医院  
院長  
石田 誠夫 先生



129名の皆様からご参加いただきました。「色々な眼の病気を奥深く聞けて良かったです」「大変面白く、わかり易い講話で、素晴らしいお話でした」等の感想をいただきました。

## 第4回 9月21日

華麗なる加齢を目指そう！  
女性だけではなく男性にも起こる  
更年期障害について

新潟県立看護大学  
母性看護学・助産学 准教授  
西川 美樹 先生



82名の皆様からご参加いただきました。「自分自身を見つめなおす機会にしたい」「年をとることを恐れず新しいことに取り組めるよう過ごしていきたい」等の感想をいただきました。

## 第6回いきいきサロンのご案内 ※定員100名、事前申し込み制、参加費無料です。

日時	申込期間	テーマ	講師
11/16(木) 18:30 ～ 19:30	10/16(月) ～ 11/15(水)	ストレスマネジメント	さいがた医療センター 主任心理療法士 野村 照幸 先生

## 看護職学習支援部門

伊豆上智子、小林綾子、舩山健二、前川絵里子、  
上田恵、小林宏至、池田よし江、山田彩乃、佐藤咲子

### I 本部門の事業目的

新潟県内、特に上越地域の現職の看護師や潜在看護師の資質向上を目指し、様々な学習および研修の機会を提供する。このことにより看護職の資質向上をはかり、県民のヘルスケアの充実を目指す。

### II 2023 年度の事業概要

本部門では、公開講座とバーチャルカレッジの2つの活動を通して、現職の看護師や潜在看護師のリカレント教育を推進する事業「どこでもカレッジプロジェクト」を実施している。今年度は、看護職向け公開講座の開催（6回）、バーチャルカレッジの運営、どこカレ通信の発行（2回）、を行った。以下に、事業の詳細を記す。

#### 1 看護職学習支援公開講座

新型コロナウイルス感染症の影響を受けにくい開催方法を継続し、全講座とも Web 会議システム Zoom を使用したオンライン講義をライブ配信した。各講座の運営担当者は、公開講座運営マニュアルを用いて、講師の準備状況を把握して対応した。参加者には講座学習資料と Web 会議システム Zoom の使用手順を示した資料を送付して講座当日の電話対応窓口を整えた。Zoom の使用経験が少ない参加者の多い講座では、講座当日の開始前に Zoom の操作方法を説明して対応した。全6回の講座を通じて運営側の通信障害はなかったが、事前調整を実施して呼吸音見本を使用した講座では、一部の参加者から音声の聞き取りにくかったとの声があった。

今年度の公開講座は、看護研究支援コースと看護現場に活かすコースの2コース6講座で構成した（表1参照）。看護研究支援コース「看護研究のテーマをみつけよう」、「看護研究方法の理解」、「研究計画書の書き方」の3講座は、昨年度に引き続き本学の石田和子先生に担当していただいた。参加者の満足度は高く、「講座を通じて身近な疑問を研究テーマにつなげる視点がわかった」、「研究方法の理解が深まった」との声が寄せられた。看護現場に活かすコース3講座は、看護職の関心が集まるテーマや日常の実践に活用しやすい内容から昨年度と重ならないテーマを選出した。「何か変！院内急変時の対応力を磨くー急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応ー」は、新潟県立中央病院救急看護認定看護師の涌井幸恵氏を講師に迎えた。特別養護老人ホームや訪問看護ステーション等に所属する看護師の受講が多く、企画時に意図した小規模施設の実践を担う看護師の参加が得られた。講座の内容は好評で「学習内容を日々の実践に活かしたい」との声が多く、満足度も高かった。「高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケア」は、本学の酒井禎子先生に担当していただいた。参加者アンケートの回答から、高齢者自身の喪失体験や高齢の家族を喪失する不安や悲嘆へのケアの重要性を理解したこと、高齢者本人の意思を尊重した質の高いエンド・オブ・ライフ・ケアの実践について考えた様子があった。「看護職のためのセルフコンパッションー自身を癒し・労り・安らぐー」は、本学の舩山健二先生に担当していただいた。新興感染症の急速な拡大と対応の長期化を経て、看護職自身のメンタルヘルスをより良く保つ必要性が高まっていることから、看護

職自身のセルフケアを学ぶ内容を企画した。参加者は2名にとどまったが、講座での参加者の様子から期待に応える内容が提供できたと評価している。

公開講座参加者の声は、オンライン講義を開始した2021年度からGoogleフォームによる無記名のWebアンケートで収集している。今年度は、公開講座の開始に先立ってアンケートを見直し、質問文と回答肢の表現を整えて使用した。各講座の終了時に運営担当者が参加者アンケートについて説明して協力を依頼し、アンケートフォームのURLを提示して回答を求めた。アンケート回答率は50~71%で受講講座への満足度は総じて高かった。

今年度はWeb会議システムを利用して全講座を実施し、参加者の期待に応える内容が概ね提供できた。新型コロナウイルス感染症の5類移行を受けて、次年度の公開講座は内容に応じてオンライン開催と本学で学ぶ対面型開催のいずれかで開催することとし、看護実践に活用できる内容の学習機会が提供できるよう取り組む。

表 1. 看護職学習支援公開講座開催実績

区分	講座名	開催日	参加者数	受講料	講師(敬称略)
看護研究支援3コース	さあはじめよう看護研究① 「看護研究のテーマをみつけよう」	5月20日(土) 13:00~16:00	36	1,000円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
	さあはじめよう看護研究② 「看護研究方法の理解」	6月17日(土) 13:00~16:00	36	1,000円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
	さあはじめよう看護研究③ 「研究計画書の書き方」	7月29日(土) 13:00~16:00	22	1,000円	新潟県立看護大学 教授 石田和子
看護実践に活かす3コース	何か変！院内急変時の対応力を磨く ー急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応ー	9月9日(土) 13:30~15:30	48	1,000円	新潟県立中央病院 救急看護認定看護師 涌井 幸恵
	高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケア	9月30日(土) 13:30~15:30	39	1,000円	新潟県立看護大学 准教授 酒井 禎子
	看護職のためのセルフコンパッションー自身を癒し・労り・安らぐー	11月11日(土) 13:30~15:30	2	1,000円	新潟県立看護大学 講師 船山健二

## 2 バーチャルカレッジ

バーチャルカレッジは、本学の学習管理システム「どこでもカレッジ(通称どこカレ)」を用いて動画教材を視聴するオンデマンド学習を支援する会員制プログラムで、会員を「どこカレメイト(以下、メイト)」と呼称している。学習管理システムの使用に際して本学の規程による利用申請を要するため会員制とし、メイト登録と学修管理システム利用は無料である。

今年度の公開講座の一覧に、昨年度追加した看護研究支援コースから「文献検索の基本」、看護現場に活かすコースから「退院支援に関わる看護職の看護実践能力向上を目指した院内教育の取り組み」と「研究成果を看護実践へ還元するー文献検索のポイント・読み方・活かし方ー」の動画教材を加えたことを案内した。今年度の公開講座のうち、看護現場に活かすコースから「何か変！院内急変時の対応力を磨くー急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応ー」と「看護職のためのセルフコンパッションー自身を癒し・労り・安らぐー」の動画教材を作成した。



公開講座参加者アンケートでは、今年度からバーチャルカレッジへの要望や掲載を希望する内容について自由記述による回答を求めた。2023年度の公開講座参加者延べ183人から寄せられた7件の回答のうち6件が「特になし」で、1件は看護研究支援コースの動画教材化の要望であった。動画教材化した公開講座は、講師に協力を依頼して承諾を得た後に参加者にも動画教材化の目的で録画する旨を説明して協力を得ている。また、オンデマンド学習用の動画教材であるため、視聴時の実践に適した内容を提供する観点から動画教材の使用期間は最長5年としている。

次年度もバーチャルカレッジの利用を促す活動と、動画教材の適切な管理を継続する。

### 3 どこカレ通信

どこカレ通信は、バーチャルカレッジの会員であるメイトに向けて、公開講座やバーチャルカレッジの案内、看護研究交流センターの活動紹介を目的として、看護職学習支援公開講座の開催時期を勘案して発行している。

今年度のどこカレ通信の発行実績を表2に示した。主な内容は、公開講座の実施状況の紹介と開催案内を中心に、地域課題研究の公募や研究発表会の案内、バーチャルカレッジの紹介、メイト登録の案内等を掲載し、年2回の発行とした。52号（資料1参照）は、県内看護職が就業する836施設とメイト60名宛に、53号（資料2参照）は県内看護職が就業する836施設とメイト58名宛にそれぞれ送付した。どこカレ通信は紙面発行するほか、本学リポジトリに収載して本学ホームページで公開し、本学看護研究交流センターホームページに掲載している。

表2 どこカレ通信発行実績一覧

号名	発行時期	送付部数	主な内容
52	8月	896	公開講座の開催案内と終了報告、地域課題研究の申請案内と地域課題研究発表会の案内、メイト募集の案内
53	3月	894	公開講座の終了報告、地域課題研究助成と看護研究を学ぶ公開講座の紹介、バーチャルカレッジ新教材掲載の案内

### 4 その他

#### 1) メイト獲得に向けた取り組み

メイトについて、メイト以外も受講する公開講座時に紹介し、どこカレ通信にバーチャルカレッジの紹介と併せてメイト募集を案内して周知を図った。今年度のメイト新規登録は19名、2024年1月末時点の登録数は77名である。更新年度を迎えた27名に更新案内を送付した。

メイト登録には本学の学習管理システムの使用に必要な本学規程による利用申請手続きが含まれており、学修管理システムを含む情報システムの管理上、2年ごとの更新制で運営している。本学規程による利用申請時に押印を要する書類が含まれることから、更新を含むメイト登録手続きには郵送による書類提出が必要だった。

今年度は、メイト登録手続きの簡便化を図る方法を検討した。郵送による書類提出を減らして迅速化を図るため、Web申請用の申込フォームを新たに整えて本学看護研究交流センターホームページに実装し、本学規程による利用申請書類の押印省略について本学情報ネットワーク特別委員会に諮って承認を受けた。また、申込フォーム作成にあたり、メイト登録対象を新潟県内在住の看護

職とし、年齢は不問とすることを確認した。申込フォーム実装後から、登録者が希望する方法で登録手続きが進められるように、押印省略を承認された書類の提出は電子メールまたは郵送のいずれかを申請者が選べるようにした。

次年度からメイト登録の新規申請は Web 申請のみとして、学修管理システムを含む情報システム利用登録完了後に送付する利用者登録情報(ID、パスワード)とバーチャルカレッジ運用手順書は紙面の郵送を継続する。また、メイト登録数の増加に向けて、公開講座開催時のメイト募集案内と看護職学習支援公開講座のメイト先行申込特典を継続し、どこカレ通信のあり方を含むメイトの学習支援について検討する。

## 2) 広報活動

看護研究交流センター案内(ガイドブック)の発送、本学ホームページへの公開講座開催案内の掲載、病院や施設へのチラシの送付など、積極的に情報を公開した。公開講座開催時には、参加者に向けてバーチャルカレッジとメイト登録の案内、次回の公開講座の紹介を行い、公開講座終了後の参加者アンケートにも設問を設定した。

昨年度の看護職学習支援公開講座では、上越圏域の看護職の参加が少ない状況があったことから、今年度は上越圏域看護部長会で看護職学習支援公開講座と看護研究交流センターの活動概要を紹介する時間をいただいた。看護研究交流センター長と看護職学習支援部門長が出席し、ガイドブックや公開講座のチラシを配付して学習支援の実施を広報した。今年度は全ての公開講座に上越圏域の看護職の参加があり、参加者数は総じて増加した。

# どこカレ通信 52号

新潟県立看護大学看護研究交流センター e-mail [nirin@niigata-cn.ac.jp](mailto:nirin@niigata-cn.ac.jp)

TEL 025-526-2822

2023. 8発行



## 9月から看護現場に活かす3コースを開催します！ ただいま申込期間中です(オンライン開催)

9月9日(土) 13:30~15:30 何か変! 院内急変時の対応力を磨く  
—急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応—  
講師: 新潟県立中央病院 救急看護認定看護師 涌井幸恵氏

9月30日(土) 13:30~15:30 高齢者のエンド・オブ・ライフケア  
講師: 新潟県立看護大学 准教授 酒井禎子氏

11月11日(土) 13:30~15:30 看護職のためのセルフコンパッション—自身を癒し・労り・安らぐ—  
講師: 新潟県立看護大学 講師 船山健二氏

## 看護職学習支援公開講座「看護研究支援3コース」が 終了しました(オンライン開催)

開催日	テーマ	講師	参加者数
① 5月20日 「看護研究のテーマを見つけよう」	}	新潟県立看護大学 教授 石田和子氏	36名
② 6月17日 「看護研究方法の理解」			36名
③ 7月29日 「研究計画書の書き方」			22名

<アンケートより意見・感想>

- ・看護研究を行う意義がとてもわかりやすかった。
- ・今年度、研究することになったが、研究が久しぶりなので受講した。
- ・具体的な経験も交えて話されイメージしやすかった。看護研究をやりたいようになった。
- ・講座を受け、研究の見通しを立てることができた。
- ・研究を進めるにあたり、知りたいことがあり整理がつかない状況だが、文献を検討し、参考にして研究を進めてみようと思うことができた。実際にやらないと身につかないと思う。
- ・現場で疑問に思ったことを研究に繋げていくことが第1歩だと感じた。看護師長という立場だが、スタッフならではの気づきを認識し、応援しながら院内教育、看護研究の指導をしていこうと思う。
- ・今後の看護研究の資料として参考にできる。ただ理解するのに難しい点もあり(自分の勉強不足)、対面式などで質問しやすい環境もあると良かったと思う。

### ★★地域課題研究に挑戦しませんか？9月から公募開始です★★



このパンフレットがあなたの職場にも届いています。是非ご覧ください。

- ★ 研究の知識が必要な研究計画書は、共同研究者となる教員の指導を受け作成します。オンラインでの指導も可能です。
  - ★ 1年6か月をかけて研究に取り組みます。
  - ★ 研究に必要な資金の助成が受けられます。
- <ご案内> 10月14日(土)PM13:00から2022年度に取り組んだ地域課題研究の発表会を開催します。看護研究支援コースにご参加いただいた事をきっかけに研究に挑戦された方もいらっしゃいます。是非ご参加ください。参加費無料・申し込み要。

#### <どこカレイト募集のご案内>

★パソコンかスマホ、インターネットに接続できる環境があればいつでも・どこでも学習できる“どこカレイト”を募集しています。詳しくは下記のWebサイトをご覧ください。いずれかの問い合わせ先におたずねください。

Web サイト  
<https://www.nirin.jp/>

連絡先  
025-526-2822

メール アドレス  
[nirin@niigata-cn.ac.jp](mailto:nirin@niigata-cn.ac.jp)



# どこカレ通信

## 第 53 号

2024. 3. 1 発行

新潟県立看護大学看護研究交流センター

e-mail [nirin@niigata-cn.ac.jp](mailto:nirin@niigata-cn.ac.jp)

TEL 025-526-2822

### 令和 5 年度「看護現場に活かすコース」の感想をお知らせします。

R5.9.9(土) 何か変！院内急変時の対応力を磨く—急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応—

46 名の参加をいただきました。「基礎から応用まで網羅されていて、実践のイメージがつきやすかった」「日々できる観察や気づきを意識して行い、実際の急変をより早く発見できるよう今後の任務にあたっていきたい」「資料に写真や音声が使われ、わかりやすかった」等の感想をいただきました。

R5.9.30(土) 高齢者のエンド・オブ・ライフ・ケア

39 名の参加をいただきました。「高齢者の老化によるさまざまな機能低下、喪失体験、高齢者を喪失する家族の不安や悲嘆へのケアの重要性が理解できた」「施設では、看護師は直面することが多いが、他の職種はあまり関心を示さない。看護師だけが抱えるには重い課題であり、相談員・ケアマネ・介護士と一緒に考えていくための働きかけが必要だと感じた」等の感想をいただきました。

R5.11.11(土) 看護職のためのセルフコンパッション—自身を癒し・労り・安らぐ—

2 名の参加でした。看護職は自己犠牲を強いられている環境であることや、感情労働を余儀なくされて、臨床の現場で働いていることから自分の感情を感じたり、感情を言葉にすることなどを通し、自分に優しい気持ちを向けることの重要性を考えることができる講座でした。少人数であり、参加者と講師のコミュニケーションは十分図れました。



## 本センターが募集する地域課題研究について

毎年、県内の保健・医療・福祉に携わる看護職を対象に看護研究の支援を行っています。

**(支援の内容)** ・1件最大10万円の研究費の助成

・本学教員が研究計画書作成から発表まで一連の過程を支援

- ※研究に取り組んでみたいが少し不安な方
- ※課題を持っているが看護研究の経験のない方
- ※看護研究の手法を学びたいと考えている方

是非、応募をご検討ください。令和6年度の募集は9月1日から開始します。

**令和6年度も看護研究に関する公開講座を4コース開催します。**

現場で看護研究に取り組む予定の方、研究に興味のある方・・是非、ご活用ください。

5/11(土)「看護研究のテーマをみつけよう」：オンライン講義

6/22(土)「文献検索の実際」：対面講義+医中誌 Web 検索の演習

7/27(土)「看護研究方法の理解」：オンライン講義

9/28(土)「研究計画書の書き方」：対面講義

## どこでもカレッジプロジェクト（バーチャルカレッジ）について

当センターのHPに掲載する学習教材を、インターネットから学ぶことができる会員制のプログラムです。「どこカレメイト」に会員登録（無料）し、インターネット環境が整った場所であれば、いつでも、どこでもスマホやパソコンから研修動画の視聴が可能です。

どこカレメイトの申込方法 ●当センターのホームページ [メイト登録申込フォーム](#)から。

●申込用QRコードから読み取り



令和5年度に掲載した動画は以下の内容です。

・「看護職のためのセルフコンパッションー自身を癒し・労り・安らぐー」

講師：新潟県立看護大学 精神看護学講師 船山健二

・「何か変！院内急変時の対応力を磨く

ー急変予測につながるフィジカルアセスメントと急変時の対応ー」

講師：新潟県立中央病院 救急看護認定看護師 涌井幸恵

## 地域課題研究開発部門

樺澤三奈子、佐々木三和、石原千晶、安達寛人、  
早藤夕子、金井香織、五十畑麻奈美、野村優希

### I 本部門の事業目的

新潟県の保健・医療・福祉分野で働く看護職の実践現場における研究活動を支援することを通じて、新潟県の看護の質向上をめざす。

### II 活動状況

#### 1. 県全域における看護研究の促進

##### 1) 地域課題研究助成

##### (1) 継続研究課題に対する助成（表1）

新潟県内の保健医療福祉機関において看護実践に携わる看護職を対象とし、看護実践上の問題や課題の解決を目指して行われる看護研究に対する助成を実施している。令和5年度には、計14件の研究に対して助成を行い、その継続を目指して本学教員が学内共同研究者として研究支援をサポートしている。

表1. 令和3～5年度地域課題研究

年度	研究代表者	所属	学内共同研究者	研究テーマ
令和5年度	大澤 寿子	新潟県立柿崎病院	関 睦美	看護師の退院支援モデル活用の効果と課題 ～退院支援モデルを活用した教育的プロセスの効果について～
	佐藤 七重	豊栄病院豊栄訪問看護ステーション	前川絵里子 高林知佳子	神経難病療養者を担当する介護支援専門員が訪問看護師に期待すること
	志賀木綿子	総合リハビリテーションセンター みどり病院	原 等子	認知症者の医療に結び付かない理由とその特徴－認知症初期集中支援チームの活動を通して早期受診行動に結び付ける対応を考える－
	瀧澤いずみ	新潟信愛病院	山岸美奈子	A 県内の病院に勤務する看護師の臨床における看護研究活動の課題と効果的な支援の検討
	外川 友子	長岡赤十字病院	相澤 達也	A 病院救急病棟看護師の臨床看護実践の状況における携帯用擦式アルコール消毒薬による手指衛生の認識
	箕輪 明美	長岡赤十字病院	石原 千晶 <sup>注1</sup>	乳房再建手術における前頸部皮膚障害予防への取り組み～統一された看護を実施するために～
	柳澤美直代	藤田企画グループホーム 癒しの家	東條 紀子	認知症対応型共同生活介護における医師不在時の ICT を活用した遠隔看取りの実際
令和4年度	武田 一久	渡辺内科医院	東條 紀子	A 地域の入居型介護施設における透析患者の入所に関する現状と課題 ー介護施設の職種に焦点を当ててー
	関 真和	長岡赤十字病院	原 等子	身体抑制の低減に向けた実践 ー看護師の年代別インタビューによる課題分析を踏まえた介入をとおしてー
	桑原香菜子	長岡赤十字病院	石岡 幸恵	在宅酸素療法を受ける患者の医療機器関連圧迫創 (MDRPU) に対する認識と対処の実際
	米持 純子	新潟県立中央病院	岡村 典子	当院のコロナ専用病棟に勤務する看護師の身体的・精神的影響に関する実態調査
	吉村登紀恵	新潟労災病院	酒井 禎子	A 病院壮年期女性看護師の骨密度と骨粗鬆症の知識に関する実態調査
	高橋 恵美	厚生連上越総合病院	伊豆上智子	確認不足によるインシデントの分析と対策
令和3年度 <sup>注2</sup>	皆川みどり	長岡赤十字病院	樺澤三奈子	外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難と取り組み
	佐藤 暁	さいがた医療センター	安達 寛人	精神科急性期病棟における睡眠改善に向けた取り組み

(注1) 令和6年度より担当者変更の見込み

(注2) 令和3年度地域課題研究12件のうち、止むを得ない事情により、令和5年度まで研究期間延長が認められた2件を掲載

## (2) 新規研究課題の公募（表 2）

令和 6 年度の地域課題研究の公募を 12 月 11 日（月）に終了した。審査の結果、5 件が採択された。12 月 19 日（火）にオンラインにて地域課題研究オリエンテーションを行った。2024 年 3 月 8 日（金）の研究計画書の提出を目指し、研究代表者および研究メンバーが、学内共同研究者である本学教員のサポートを受けて研究計画を検討中である。

表 2. 令和 6 年度地域課題研究

年度	申請代表者	所属	学内共同研究者	研究テーマ
令和 6 年度	金子 愛由	長岡赤十字病院	樺澤三奈子	化学療法を受ける肺がん患者の在宅における感染予防行動の実態と行動の動機に関する研究
	星野貴美子	長岡赤十字病院	伊藤美由紀	NICU 入院児の母親が抱く授乳や搾乳時の不快感の現状と課題
	源川 雅斗	長岡赤十字病院	小林 綾子	顎矯正手術を受け術後顎間固定を受けた患者の術前の思いと手術に向けた看護介入の検討
	水澤 真由美	新潟県立中央病院	岡村 典子	看護提供方式による新人教育への影響
	霜田 章子	上越総合病院	松山 健二 永吉 雅人	外来業務量データに基づいた外来人員配置の検討

## 2) 地域課題研究発表会の開催（図 1, 表 3）

10 月 14 日（土）に本学の会場参加とオンラインを併用したハイブリッド形式にて、2023 年地域課題研究発表会（2021 年度・2022 年度研究報告）を開催した。この発表会は、新潟県上越地域振興局健康福祉環境部との共催により、上越地域看護研究との合同企画である。実行委員会は上越地域の 7 病院の看護職と共催者で構成され、本部門では、企画、抄録作成、参加募集、企業展示 2 件の手配を含む準備と、当日の発表会の運営を担った。

地域課題研究発表会では、計 7 件の口頭発表が本学会場にて行われた。発表会后、発表内容を録画した動画を 1 か月間、オンデマンドで配信した。参加者は計 124 名、そのうち会場参加者は 95 名（前年度 74 名）、オンライン参加者 10 名（前年度 28 名）、12 演題のオンデマンド配信におけるアクセス件数は 195 件であった。

## 2. 上越圏域における看護研究の促進（図 1）

新潟県上越地域振興局健康福祉環境部との共催により、10 月 14 日（土）に本学の会場参加とオンラインを併用したハイブリッド形式にて、上越地域看護研究と地域課題研究との合同発表を開催した。実行委員会は、上越地域の 7 病院の看護職と共催者で構成され、上越地域看護研究発表会の演題については、本部門で査読を担った。

地域課題研究発表会では計 7 件の口頭発表が、上越地域看護研究発表会では計 5 件の口頭発表が、全て一会場にて行われた。発表会后、発表内容を録画した動画を 1 か月間、オンデマンドで配信した。参加者数は上記 1 の 2) に前述した。合同発表会後のアンケートでは、満足・やや満足と回答した参加者は 94%、開催形式については全員が満足と回答した(n=54)。

## III. 事業の評価と今後の課題

次年度の地域課題研究発表会は、2024 年 10 月 19 日（土）、上越地域看護研究との合同開催を予定している。地域課題研究発表会・上越地域看護研究発表会への参加者増員のため、



ハイブリッド形式による発表会の希望が多いことから次年度も同形式で開催する。ハイブリッド形式による開催は、医療施設等では未だ感染対策を要する状況や県西端にある本学の地理的な特性に鑑みて有意義であると考えられる。

その一方で、会場参加者は増加傾向にあることから、会場に出向いて研究成果を共有することの魅力を広められるよう、負担のない進行設定や心地よい会場設営に努めたい。具体的には、発表における心理的負担を軽減するために、機器操作のサポートを担う研究メンバーの登壇を許可することや発表終了時間をランプで知らせるスピーチタイマーランプの導入、機器操作のための練習時間の確保、会場の拡大の検討、企業への展示依頼を計画している。

また、研究発表会の演題数・参加者数及び地域課題研究の助成申請数の増加をめざし、募集要項や公募要領の郵送に加え、看護職一人ひとりに情報が届くよう、上越圏域の医療施設を中心に病棟にて公募要領の対面配布を行う。

地域看護課題を共有

職員や研究を発表・報告

県立看護大

県や上越地域の看護職員・大学教員らが研究の発表・報告を行う「上越地域看護研究発表会」と「地域課題研究発表会」が14日、上越市新南町の県立看護大で同時に開かれた。感染予防対策で会場とWeb配信を併用した。

県上越地域振興局健康福祉環境部、同大看護研究交流センターが主催。看護研究の発表や実践報告を通じて成果を共有し、上越地域における看護ケアの質の向上、地域ケア体制の充実を目指すもの。今回で13回目を数える。

演題は両会合合わせて12題。「園芸活動が閉鎖病棟の認知症患者のBPSD（認知症の行動・心理症状）に与える影響と効果について」、「新型コロナウイルス感染症専用病棟に勤務する看護師が感じている身体的・精神的影響に関する実態調査」など、特色ある発表がなされた。これらの様子は10月末までオンデマンド配信する。

また、会場では障害福祉サービス事業所



県立看護大の神田清子学長があいさつ。「きょうの意見交換を次の実践に生かしてほしい」と呼びかけた

図1. 第13回上越地域看護研究発表会 2023年地域課題研究発表会 合同発表会の様子  
 (注) 左の記事：2023年10月17日(水)の上越タイムズ002面の記事より、許諾を得て引用

表 3. 第 13 回上越地域看護研究発表会 2023 年地域課題研究発表会 合同発表会プログラム

令和 5 年 10 月 14 日 (土) 13:00~16:00 (開場 12:30)

会場：県立看護大学第 2 ホール (会場参加 & オンライン参加) オンデマンド配信

主催：新潟県上越地域振興局健康福祉環境部・新潟県立看護大学看護研究交流センター

時 間	第 2 ホール
12:30	開場、Zoom 参加者入室
13:00~13:10	開会式 上越地域振興局健康福祉環境部部長・新潟県立看護大学学長あいさつ
13:10~13:40	<p><b>演題発表【A-1 群：上越地域看護研究】</b></p> <p>座長 佐々木 三和 (新潟県立看護大学)</p> <p>演題 1 浦沢 昌恵 (さいがた医療センター) 院内認定看護師養成研修開始から今に至るまでの経過</p> <p>演題 2 渡邊 礼夢 (厚生連上越総合病院) ドブタミン注射薬の投与を継続して在宅医療へ移行した心不全末期患者・ 家族への緩和ケア</p> <p>演題 3 金子 茂美 (常心会 川室記念病院) 園芸活動が閉鎖病棟の認知症患者の BPSD に与える影響と効果について</p>
13:45~14:30	<p><b>演題発表【B-1 群：地域課題研究】</b></p> <p>座長 石原 千晶 (新潟県立看護大学)</p> <p>演題 1 皆川 みどり (長岡赤十字病院) 外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難と取り組み</p> <p>演題 2 米持 純子 (新潟県立中央病院) 新型コロナウイルス感染症専用病棟に勤務する看護師の身体的・精神的 影響に関する実態調査</p> <p>演題 3 吉村 登紀恵 (新潟労災病院) A 病院壮年期女性看護師の骨密度と骨粗鬆症の知識に関する実態調査</p> <p>演題 4 高橋 恵美 (厚生連上越総合病院) 確認不足によるインシデントの分析と対策</p>
休憩 (20 分)	
14:50~15:10	<p><b>演題発表【A-2 群：上越地域看護研究】</b></p> <p>座長 岩崎 美月 (新潟労災病院)</p> <p>演題 4 市村 遥 (さいがた医療センター) 当院におけるクロザピン多職種研修会の取り組みと今後の展望</p> <p>演題 5 滝澤 弘規 (さいがた医療センター) 難治性統合失調症分野院内認定看護師としての活動報告 ～より安全なクロザピン治療を目指して～</p>
15:15~15:45	<p><b>演題発表【B-2 群：地域課題研究】</b></p> <p>座長 安達 寛人 (新潟県立看護大学)</p> <p>演題 5 佐藤 暁 (さいがた医療センター) 精神急性期病棟における睡眠改善に向けた取り組み</p> <p>演題 6 武田 一久 (医療社団法人 渡辺内科医院) A 地域における高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する介護 支援専門員のケアマネジメントの経験と心情</p> <p>演題 7 関 真和 (長岡赤十字病院) 身体抑制の低減に向けた実践—看護師の年代別インタビューによる課題 分析を踏まえた介入をとおして—</p>
15:50~16:00	閉会式 看護研究交流センター長 写真撮影

## 特別研究部門

岡村典子、伊豆上智子、山田恵子、樺澤三奈子、原等子、丸山紀子、大竹順司

### I 本部門の事業目的

新潟県内の保健医療看護上の課題に対応した研究課題を設定して取組み、一般市民の健康の保持・増進や看護職の質的向上の推進の一助として貢献することである。

### II 2023年度の事業概要

当部門では、新潟県内の病院施設における看護研究実施状況、及び支援体制を明らかにし、今後の研究推進のあり方を検討することを目的とした研究課題に取り組んでおり、2023年度は調査の実施、及びデータの整理等を行った。具体的には、令和5年4月より、新潟県ホームページに公表された新潟県病院名簿（全県統一版）（令和4年4月1日現在）に掲載されている120病院に所属する看護研究推進担当者（該当者がいない場合は看護部長、またはそれに準ずる責任者）を対象に、質問票を配布（郵送）した。配布数は119件、回収数は63件である。うち同意のないもの6件、欠損値の多いもの2件を除き、55件を調査対象とした。2024年3月現在、研究データの確認を行うとともに、分析へと進めていく予定である。

本研究の実施により、看護研究への支援のあり方が明らかになれば、看護研究交流センターにおける看護職への学習支援内容を具体的にすることができるとともに、新潟県内における看護研究の取り組みの増加に貢献できると考えている。

### III 今後の取り組み

取り組んでいる研究は、分析を進め、結果を看護研究交流センターの地域課題研究開発部門、看護職学習支援部門の活動に反映させるとともに、看護系学会の学術集会等での発表や誌上で発表する予定である。

また、当部門の事業は2年間隔（2022年度から2023年度）で研究を進めているが、2023年度の取り組みが滞っていることを踏まえ、2024年度の活動（新たな研究課題の探索）の進め方を検討する必要がある。2023年度の研究データの分析を進めるとともに、2024年度前半までに学会発表や学会誌投稿への見通しを立てる。また、2024年度後半より、新たに取り組む研究課題の探索（新潟県及び上越地域の課題に対応した研究課題を探索）も進めていく。これら2点を進めるために、部門の会議を定期的で開催するとともに、担当を決める等の対応を進めていく。

## 専門性の高い看護職育成部門

岡村典子、石田和子、小長谷百絵、伊豆上智子、原等子、樺澤三奈子

### I 本部門の設置経緯

新潟県では 2019 年に専門性の高い看護職育成検討会を設置し、本学が委託先となり小泉前学長を中心に検討を進め、2020 年 3 月に「専門性の高い看護職員の育成検討会報告書」をとりまとめた。報告書では、新潟県において専門看護師や認定看護師などの専門性の高い看護職員の育成を県内看護系大学などの各機関が単独で行うのは困難な状況にあり、行政と日本看護協会、大学、医療機関等の関係機関が連携して育成していく必要があることを提言した。

2023 年、上記提言にある「専門性の高い看護職員の育成に向けた新潟県モデル」の実装化に向け、新潟県及び新潟県看護協会から、本学に対し協力要請があった。

については、この「専門性の高い看護職員の育成に向けた新潟県モデル」の実装化は、本学として、建学の精神及び本学の使命と任務に合致することから主体的に参画することとし、これを担う組織として「専門性の高い看護職育成部門」を看護研究交流センター内に、2023 年 10 月に設置した。

### II 本部門の事業目的

専門性の高い看護職員の育成に向け、行政（県）や新潟県看護協会、医療機関等の関係機関とともに連携して取り組む。

活動内容として、①上越圏域看護部長会の活動支援、②専門看護師のネットワーク支援（新潟県看護協会と連携）、③その他 専門性の高い看護職育成に必要と認められる事業、の 3 つを掲げた。

### II 2023 年度の事業概要

#### 1. 上越圏域看護部長会の活動支援

活動の支援にあたり、2024 年 1 月に代表者らと顔合わせを行った。そこで、上越圏域看護部長会の令和 5 年度活動について、圏域で協働して取り組む課題と取り組みの概要が説明された。また、上越圏域における専門性の高い看護職員の確保と定着に向けて、新任期看護職員と看護管理者の育成を含む人的資源管理を主な課題として、次年度の活動に向けた情報交換を行った。続いて、2024 年 2 月には第 1 回の打ち合わせを開催し、次年度の活動として、看護管理者の育成に向けた看護部長の思いや考えを共有するため、看護部長を対象とした意見交換会を企画することとなった。テーマは、“看護師長、看護主任らをどう育てたいか（育成像）”とし、4 月初旬の平日夕方を目途に調整していくこととした。意見交換はブレインストーミングにて行うこととし、主催は上越圏域の看護部長会、本学の当部門は共催とすることを確認して本学を会場とすることを提案した。また、検討の際に、看護師長、看護主任の現状として、論理的思考と概念化に課題があること等の意見が出された。そして、看護師長、看護主任の育成像が明確になることで、“その人たちが育成するために看護部長が学ぶこと”が見いだされるのではないかな等の意見があった。

## 2. 専門看護師のネットワーク支援

新潟県看護協会と連携し、「専門看護師フォローアップ研修」（2024年3月9日）を、本学を会場に開催した。本研修のねらいは、「新潟県内の専門看護師が分野を超えて集い、役割開発について意見を交換するとともに、地域にて活動を広げるための力をつける」とした。このねらいを踏まえ、今回のテーマは CNS にとって学習ニーズが高い「倫理調整」とした。

開催にあたり、新潟県看護協会、および専門看護師（Certified Nurse Specialist :CNS）4名（がん看護専門看護師、母性看護専門看護師、老人看護専門看護師、地域看護専門看護師）の協力を得て企画を進めた。

当日は、県内の5領域の CNS 15名が参加し、午前は、「倫理調整」について、横浜市立大学がん看護 CNS の林めぐみ先生より講義をしていただいた。午後は、「所属施設における倫理調整の取組みと課題」をテーマとしたシンポジウムを開催し、4名の CNS に発表していただき、意見交換を行った。その後、「CNS の倫理調整について（実際、悩み、課題）」について、グループワークを行い参加者個々の思い・課題を共有した。シンポジウムおよびグループワークでの話題の中心は、倫理的感受性の高い組織の風土をどう作るか、など倫理調整の前提となる課題が主であった。研修後アンケートの回答からは、CNS が分野を超えて集うことで意見交換や顔の見える関係づくりが促進された様子が窺えたことから、対面でグループワークを活用した方法はねらいに適していたと考えられる。

## Ⅲ 今後の取り組み

本部門の発足は令和5年10月であり、部門員のコンセンサスを得る過程を経て、活動を年度内に進めていく必要があり、スケジュールは非常に厳しい状況があった。今年度は、定期的な部門会議を開催し、中心となる二つの活動のリーダーとなる部門員の主導により、活動の計画・実施を円滑に進めていく予定である。

「上越圏域看護部長会の活動支援」については、看護管理者の育成に向けた研修開催を含む活動の企画や運営の支援を引き続き行っていくとともに、新任看護職員を対象とした研修についても協力していく。

「専門看護師のネットワーク支援」については、企画する研修のねらいが CNS の活動支援とする場合、講義の内容によっては参加対象を看護職に広げるなど、CNS の役割と活動に対するジェネラリストの理解を促進することも視野に入れる必要があり、より効果的な方法を検討していく必要がある。また、参加者数の増加を図るため、令和5年度同様に CNS とともに、看護管理者へ開催案内を送付するとともに、開催時期や日時などの検討を進めていく。

### Ⅲ. 事務局報告

### Ⅲ 令和5年度 出前講座実績 (開催順)

	開催日	テーマ	講師名	依頼主	参加人数
1	6/13(火)	認知症のこと知りたい(共に生きる編)	原 等子	栄町秋葉会	30名
2	6/14(水)	人生会議を始めてみませんか?	酒井禎子	上越市新道地区公民館	25名
3	6/21(水)	認知症のこと知りたい(共に生きる編)	原 等子	木田寿会	23名
4	6/22(木)	乳幼児の体調不良時のホームケア	山田恵子	認定こども園 下門前保育園	45名
5	6/23(金)	乳幼児の体調不良時のホームケア	山田恵子	直江津地区公民館	4名
6	7/11(火)	いざという時の日用品を使った応急手当	山田恵子	上越社協 板倉支所	7名
7	7/22(土)	認知症の人と家族のこと もう少し詳しく知りたい(病気・暮らし・支援)	原 等子	岩神町内会	22名
8	8/4(金)	人生会議を始めてみませんか?	酒井禎子	医療法人知命堂病院	26名
9	8/8(火)	人生会議を始めてみませんか?	酒井禎子	東城二長寿会	19名
10	8/8(火)	いざという時の日用品を使った応急手当	山田恵子	御殿山若葉会	25名
11	8/18(金)	人生会議を始めてみませんか?	酒井禎子	医療法人知命堂病院	24名
13	9/26(火)	認知症のこと知りたい(共に生きる編)	原 等子	金星クラブ	17名
14	10/4(水)	乳幼児の体調不良時のホームケア	山田恵子	真行寺幼稚園	4名
15	10/13(金)	乳幼児の体調不良時のホームケア	山田恵子	八千穂地区公民館	4名
12	10/25(水)	認知症のこと知りたい(共に生きる編)	原 等子	特老 さくら聖母の園	43名
16	10/30(月)	いざという時の日用品を使った応急手当	山田恵子	誰でも集える場所、じくの家	20名
17	11/5(日)	いざという時の日用品を使った応急手当	山田恵子	城北「北進会」	32名

18	11/20(月)	乳幼児の怪我の対応(Zoom)	山田恵子	高田幼稚園 PTA	22名
19	11/28(火)	認知症のこと知りたい(共に生きる編)	原 等子	妙高市更生保護の会	25名
20	12/18(月)	人生会議を始めてみませんか?	酒井禎子	糸魚川市老連連絡協議会	41名
21	1/31(水)	乳幼児の怪我の対応	山田恵子	真行寺幼稚園	6名
22	2/5 (月)	乳幼児の体調不良時のホームケア	山田恵子	NPO すいみい	7名
23	2/28(水)	認知症の人と家族のこと もう少し詳しく知りたい(病気・くらし・支援)	原 等子	健康で豊かに暮らす会	45名
24	3/13(水)	人生会議を始めてみませんか?	酒井禎子	上越社会福祉協議会 頸城支所	50名



令和5年度 出前講座アンケート結果（依頼者回答より要約）

実施件数：24件（依頼件数：24件）参加人数：566人

テーマ/講師名	講座への感想
<p>“人生会議”を始めてみませんか？ 講師：成人看護学准教授 酒井 禎子</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段、自分が望む医療やケアについてあらためて見つめなおすきっかけとなった。普段から大切な家族や友人と共有しあう事の大切さを学ぶ事ができた。ゲームの時間や共有する時間がもう少しあるとさらに深めることができたか。</li> <li>・参加者のアンケートから、人生について「理解できた・まあまあ理解できた」との回答が100%であった。感想についても「ゲームを通して人生会議の意義が理解できた、大事なことを大切な人と話しておくことが理解できた」が多く聞かれ、人生会議の内容については理解されたと考える。</li> <li>・日頃聞きなれない「人生会議」の言葉の説明を解りやすくして頂き、参加者をスムーズに講義に導入していただきました。これからの人生に、家族・知人等と繰り返し話し合い、「人生会議」の共有が如何に必要なのか、周囲の人たちと会議するきっかけになったと思います。講師の先生には、わかりやすく講義して頂き、「もしバナゲーム」のグループ内で発表できたと満足しています。</li> <li>・自分の年代に合う話の内容であり良かった。わかりやすく、楽しく参加できた。「もしも」に備えることは考えていませんでしたが、考えなければならぬ時期になっているんだと思った。</li> <li>・参加者から、様々な選択肢、価値観があることを学ぶことができたと感じました。</li> <li>・「いざ」という時が来る前に知ることができてよかったです。</li> </ul>
<p>認知症のこと知りたい （ともに生きる編） 講師：老年看護学准教授 原 等子</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これから我が身にも起こりうるかもしれない認知症に暗いイメージを持っていましたが、周囲の理解を得ることによって、住みよい環境づくりができると考えられるようになりました。今、出来ることをできるだけ維持していくことを心がけていきます。貴重な時間をありがとうございました。</li> <li>・今回、認知症の内容だけでなく、少し専門的な部分までの講座だったと思います。講義時間が足りないくらい良い講座でした。</li> <li>・認知症は、誰もが発症の可能性を持つ事でありながら、その特徴・種類、そして家族をはじめとした周囲の心得等、今まで何ら解らないことが多く不安でした。しかし、講義を聞き、その感じ方、考え方が変わりました。認知症は恥ずかしい事ではない。できるだけ、その状態をオープンにして、周囲の力を借り、繋がりを持つようにする。これからは年齢を気にせず、前向きに生きたいと思いました。認知症の原因に有効とされる新薬の承認が期待されています。認知症について正しく知り、やさしい地域づくりの社会が実現することを切に望みます。</li> <li>・令和4年に初級編、今年はともに生きる編の講座をしてもらい、参加者の9割以上が2年続けての参加者でした。</li> <li>・認知症の人を仲間として接することの大切さを、終始具体的な事例にもとづいてお話いただいたので、高齢者にもよくわかり、今後の参考になったと思います。</li> <li>・認知症は誰もが避けられない身近な病気です。自分自身にとっても家族や友人との関係においても、共に生きることの大切さやヒントを実際の事例を掲げながら具体的に解りやすくお話いただきました。</li> </ul>

テーマ/講師名	講座への感想
認知症の人と家族のこともう少し詳しく知りたい (病気・くらし・支援) 講師：老年看護学准教授 原 等子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・解りやすい説明でした。明るく笑顔での進行で質問も多く出ました。これからの集落運営面でもヒントを頂きました。</li> </ul>
乳幼児の体調不良時のホームケア 講師：小児看護学准教授 山田恵子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お子さん連れでの参加の方もいましたが、快くお許しいただき、質問に対する回答も丁寧で、参加者の満足度が高かった。用意いただいた資料もわかりやすく、具体的な対応や手当について説明があり、テーマ名の通り「いざという時に役立つ」知識を学ぶ事ができた。</li> <li>・資料を基に解りやすく具体的に話していただけた。病院受診のタイミングや目安を、教えていただけて良かったです。</li> <li>・講座の後に、保護者からの質問や自身のお子さんに関連した質問が多く出ており、参加者の関心も高かったように感じられた。</li> <li>・質問を交えながらアットホームな環境の中でホームケアの方法を学ぶ事ができたという声が聞けた。講師にはテーマ以外の質問にも丁寧に答えていただき、有意義な時間を過ごす事ができた。</li> </ul>
乳幼児の怪我の対応 講師：小児看護学准教授 山田恵子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乳幼児はいつ何が起こるかわからないので、事前に勉強しておくことがとても大切だと感じました。初めてのオンライン講演でしたが、画面共有しながら、資料がとても分かりやすく大変勉強になりました。ご多忙の中、貴重なお話をありがとうございます。</li> <li>・応急処置の仕方など丁寧に教えていただき、どんな物を使って手当をすればよいか、見本もありわかりやすかった。保護者からの質問にも一つひとつ答えていただき充実した時間となった。</li> </ul>
いざという時の日用品を使った応急手当	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表題通りの応急手当の方法をわかりやすく教えてくださいました。資料もパワーポイントも非常にわかりやすかった。日用品を使っのやり方も丁寧に指導してもらい、みんな納得していた。こんなに身近な物が役に立つこともよくわかり、本当にいざという時に役立てるようにしていきたいと思った。</li> <li>・ビニール袋やスカーフ等を使った止血方法や三角巾になる方法や身近にある物を使っの応急手当の方法を教えてください、とても勉強になりました。清潔なビニール袋をかばんに入れておくに役に立つ事がわかりました。</li> <li>・先生の話し方や説明の仕方が丁寧で理解しやすく大変良かった。また、説明の中でモデルを使っの時は、いろいろとモデルを変え、みんなの中へ入って来て大きな声で説明されました。</li> <li>・身近にあるカーディガン、新聞紙を使っの裂傷や骨折した時の手足の固定方法や熱中症予防対策のお話、三角巾の使用方法が特に参考になりました。ドラッグストアに三角巾を買いに行こうという声も聞こえました。</li> </ul>

#### ◆出前講座についての意見・感想

- ・電話対応がとても丁寧で手続きがわかりやすかったです。ありがとうございました。
- ・内容が希望していた内容で良かった。手続きもさほど難しくなくスムーズであった。
- ・講座日が近くなってから日にちの変更をし、参加人数も少なく、講師として来ていただいたのに申し訳ない気持ちでした。ですが、参加者の心配や不安を丁寧に聴いて、それぞれに対しやさしく寄り添った言葉で回答して下さったおかげで充実した講座が実施できまし

た。ありがとうございました。

- ・限られた時間の中での講義でしたので、忘れてしまうこともあるので、継続開催が良いと感じました。今回、学生さんからも来て頂き、楽しく勉強することができ皆さん喜んでいました。
- ・今回はスタッフに「人生会議」について理解してもらい、今後、自施設が「人生最後の場所の提供」になった場合、利用者や家族への対応に活かすことを目的に、2回同じ内容でお願いしました。
- ・今回で、貴学から4回目の受講ですが、毎回わかりやすい講義により、意義のある「出前講座」であったと満足しています。
- ・先生方もお忙しいのは承知しているが、返信が少し遅いように思う。事務局との連絡確認は無理でしょうか？
- ・今回、予定時間を15分ほどオーバーしたので、できるだけ時間内でお願いしたい。(講座の後に保育参観を予定していたため)
- ・先生が自ら打ち合わせに来て下さり本当に助かりました。落ち度なく運営ができました。
- ・初めての事だったので、特に問題なく希望通りに行きました。
- ・今回この様な講座があることを、ある市議会議員の方から知りましたが、受講して本当に良かったので、他の団体、近隣の町内会にも広く伝えていきたいと思えますし、2~3年周期で同じ講座を受講することで身に付くことと思えます。
- ・子育てをしている保護者向けのテーマを増やしていただけるとありがたいです。
- ・先生と会場下見も含め事前打ち合わせができて良かったです。
- ・想定以上の参加者でしたが、先生から臨機応変に対応いただき助かりました。

## IV. 令和 5 年度地域課題研究助成の報告

## 2022 年度地域課題研究

1. 皆川みどり : 長岡赤十字病院 (2021 年度)
2. 佐藤 暁 : さいがた医療センター (2021 年度)
3. 武田 一久 : 渡辺内科医院
4. 関 真和 : 長岡赤十字病院
5. 米持 純子 : 県立中央病院
6. 吉村 登紀恵 : 新潟労災病院
7. 高橋 恵美 : 上越総合病院

## 外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難と取り組み

### 1. 研究代表者及び所属

研究代表者：皆川 みどり 長岡赤十字病院

### 2. 研究分担者氏名

伊豆 一美（所属：長岡赤十字病院）

福王寺 理沙（所属：長岡赤十字病院）

### 3. 学内責任者

新潟県立看護大学 樺澤 三奈子

### 4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	12,420	0	0	87,580	100,000

### 5. 研究成果の公表

新潟看護ケア研究学会学術集会にて発表予定である。

## 外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難と取り組み

皆川みどり<sup>1)</sup>、伊豆一美<sup>1)</sup>、福王寺理沙<sup>1)</sup>、樺澤三奈子<sup>2)</sup>

1) 長岡赤十字病院 人工腎センター 2) 新潟県立看護大学

キーワード：血液透析，高齢者，困難，取り組み

【目的】わが国では、2009年の慢性腎臓病ガイドライン策定を契機に、より安全な血液透析（以下、透析とする）の導入と維持が可能となった。これに伴い、透析患者の延命化が進むとともに、人口の高齢化と相まって高齢の外来透析患者が増加傾向にある。外来透析に通院する高齢患者は、加齢による心身や生活の変化とともに生じると考えられる困難に取り組みながら、生涯の仕事である透析を継続していると考えられる。高齢患者にとっての外来透析の障壁となる状態や状況を解決したりその影響を減じたりするための看護支援を検討するために、本研究では、外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難および取り組みを明らかにすることを目的とする。

【方法】甲信越地方にあるA一般病院にて外来透析を1年以上継続している60～79歳の患者を対象に半構造化面接を実施し、対象者ごとに逐語録を作成した。データ分析では、困難と取り組みを表す文脈をそれぞれありのまま抽出してコード化を行い、意味内容の類似するものを集めてサブカテゴリー・カテゴリー化した。倫理的配慮では、研究対象者の担当看護師ではない研究者が、研究の概要、参加が自由意思であること、個人情報保護方法、利益・不利益と不利益への対応について、文書を用いて口頭で説明した。本研究は長岡赤十字病院倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】対象者は12名、65～76歳までの平均年齢70.5歳の男女6名ずつであり、このうち前期高齢者が9名であった。透析継続期間は2～22年であり半数以上が5年以上10年未満であった。通院手段は、自らまたは家族が運転する自家用車が10名であり、歩行補助具を常用していた者は2名であった。分析の結果、外来透析に通院する高齢患者の透析継続における困難は、逐語録から得られた59コードより、【毎回毎週、一生懸命、透析を続けなければならない】、【透析に伴う体の苦痛がある】、【じわじわと、しかし確実に衰えつつある】、【老いた先もずっと透析を続けられるのかわからない】等の5カテゴリーに集約された。また困難に対する取り組みは、逐語録から得られた99コードより、【透析に伴う体の苦痛を和らげる】、【老い衰えゆく先々に備えて体力をつける】、【老いても透析に通える手段を準備する】等の8カテゴリーに集約された。

【考察】結果より、外来透析に通院する高齢患者は、透析を続けなければならないことを困難と認識しつつも、透析による苦痛を和らげ、透析による恩恵や周囲の人々による支えを励みに、透析を生きるための務めとして継続に努めている様子が明らかになった。特に着目すべき結果は、高齢患者が、今現在ではなく老いたこの先の不確かさを困難とらえていることである。このことは、本研究の対象者の約8割が前期高齢者であり、概ね自立して生活できる人々であったためと考えられる。また、この現状に伴い、高齢患者は確実に衰えつつあることを実感していても、【老い衰えゆく先々への備え】として体力をつけようとしているように、衰えは現時点での切実な問題ではないこと、それ故に意欲はあるものの運動を続けたいことがうかがえた。従って、近い将来の透析の継続をより確かなものにできるように、良い状態で透析を続けられるように支援しつつ、患者の衰えへの自覚に働きかけ、日常生活を行え、かつ、体力維持のためのより効果的な看護支援の必要性が示唆された。

【結論】外来透析に通院する高齢患者の透析継続の困難として、【毎回、毎週、一生懸命、透析を続けなければならない】【老いたこの先もずっと透析に通えるかわからない】などの5カテゴリーが、取り組みとして【老い衰えゆく先々に備えて体力をつける】【老いても透析に通える手段を準備する】などの8カテゴリーが明らかとなった。高齢患者が抱く透析の継続の不確かさに対し、生活の自己管理支援に加えて、患者の衰えへの自覚に働きかけ、体力維持を図るための看護支援の必要性が示唆された。

利益相反 令和3年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

## 精神科急性期病棟における睡眠改善に向けた取り組み

### 1. 研究代表者及び所属

研究代表者：佐藤 暁 元独立行政法人国立病院機構さいがた医療センター

### 2. 研究分担者氏名

佐藤暁<sup>1)</sup>、佐久間寛之<sup>1)</sup>、深石翔<sup>2)</sup>、藤田啓<sup>1)</sup>、小林さやか<sup>1)</sup>、竹内奈緒<sup>1)</sup>、皆川幸栄<sup>1)</sup>、  
工藤朝来<sup>3)</sup>、大越拓郎<sup>1)</sup>、樋掛尚文<sup>1)</sup>、青木梨恵<sup>1)</sup>

(所属：1) 国立病院機構さいがた医療センター、2) 新潟県厚生連佐渡総合病院、  
3) 国立病院機構新潟病院)

### 3. 学内責任者

新潟県立看護大学 安達 寛人

### 4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	0	77,770	77,770

### 5. 研究成果の公表

COVID-19 の感染拡大や病棟環境の変化など想定外の事態が生じたため、今後は、継続してデータ収集および統計的な睡眠への効果の検証を行い、院内発表会や関連学会等で発表し公表していく。



## 精神科急性期病棟における睡眠改善に向けた取り組み

石川真彩<sup>1)</sup>、佐藤暁<sup>2)</sup>、佐久間寛之<sup>2)</sup>、深石翔<sup>3)</sup>、藤田啓<sup>1)</sup>、小林さやか<sup>2)</sup>、竹内奈緒<sup>2)</sup>、皆川幸栄<sup>2)</sup>、  
工藤朝来<sup>4)</sup>、大越拓郎<sup>2)</sup>、樋掛尚文<sup>2)</sup>、青木梨恵<sup>2)</sup>、安達寛人<sup>5)</sup>

1) 元国立病院機構さいがた医療センター、2) 国立病院機構さいがた医療センター、3) 新潟県厚生連  
佐渡総合病院、4) 国立病院機構新潟病院、5) 新潟県立看護大学  
キーワード (3 ~5 個) : 精神科病棟、睡眠、アテネ不眠尺度、GHQ-30

### 研究概要

【目的】不眠に対する非薬物的な対処法としての睡眠調整室（以下、ぷらねたルーム）の効果を明らかにする。

【方法】A 病棟に入院中の患者で、本研究への参加に同意が得られた人を対象に、ぷらねたルームの利用を開始する前と退院前の 2 回に分け、アテネ不眠尺度、日本版 GHQ-30 (GHQ 法で採点) による自記式質問紙を実施した。データは、Microsoft Excel 2016 を用いて単純集計し、日本版 GHQ-30 の各下位概念の得点に関しては対応のある t 検定を行った (有意水準 5%)。

【倫理的配慮】本研究は、さいがた医療センターの倫理委員会の審査を受けて実施した (承認番号 21-4)。対象者に文書と口頭で説明を行い、同意書への署名をもって同意を得た。研究への参加にあたっては、任意であり、断った場合や途中で撤回した場合でも治療や看護に不利益は一切ないことを重点的に説明した。

【結果】本研究に関して同意が得られた対象者は 8 名であった。部分的な欠損項目は「無回答」として処理した。性別は男性 4 名、女性 4 名で、年齢は 10~60 代であった。アテネ不眠尺度の得点は、平均 12.38 点であった。日本版 GHQ-30 の下位概念である(A)一般的疾患傾向、(B)身体的症状、(C)睡眠障害、(D)社会的障害、(E)不安と気分変調、(F)希死念慮・うつ傾向の 6 項目の各平均点は、ぷらねたルーム利用開始前で(A)1.71、(B)1.57、(C)3.14、(D)1.43、(E)2.14、(F)1.29 であり総得点は 9.88 であった。一方、退院前の得点は、(A)1.00、(B)2.75、(C)4.75、(D)0.75、(E)2.25、(F)1.00 であり、総得点は 6.25 であった。各下位概念の平均得点に関して有意差を認めなかった (p=0.63)。

【考察】アテネ不眠尺度の得点では、6 点以上が不眠傾向とされていることから、本研究の対象者は不眠傾向にあったと言える。日本版 GHQ-30 の得点に関して有意差は認められなかったが、利用開始前と退院前の得点を比較すると、総得点に関しては低下しており、日本版 GHQ-30 のカットオフポイント 6/7 点を踏まえて平均得点を参照すると、対象者の精神の健康度は改善傾向にあったことが考えられる。しかし、各下位概念の平均得点では、「身体的症状」「睡眠障害」「不安と気分変調」の項目に関して得点が増加しており、悪化傾向であることがうかがえる。総じて、ぷらねたルームの効果があつたとは言えなかった。しかし、使用した患者の感想としては好印象の意見が多かったため、引き続き安全に注意をしながら適宜使用していく。

本研究は、同意を得られた対象者が 8 名と少なく、十分にデータを収集できなかった。引き続きデータ収集を行い、使用の効果を検証していく。

【結論】非薬物的な対処法としての環境改善による不眠への介入を試みたが、明らかな効果は見出されなかった。

### 利益相反

本研究は、2021 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

A 地域における高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する  
介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情

1. 研究代表者及び所属

代表者氏名：武田 一久 医療法人社団 渡辺内科医院

2. 研究分担者氏名

山口 綾乃 (所属：医療法人社団 渡辺内科医院)

市川 由美子 (所属：医療法人社団 渡辺内科医院)

3. 学内責任者

新潟県立看護大学 東條 紀子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	28,334	68,879	97,213

5. 研究成果の公表

研究成果の公表は 2023 年新潟県立看護大学地域課題研究発表会にて発表する予定である。

また、新潟透析医学会、日本透析医学会にて発表を予定する。

## A 地域における高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する

### 介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情

医療法人社団 渡辺内科医院 武田一久 山口綾乃 市川由美子

新潟県立看護大学 東條紀子

キーワード：高齢透析患者，介護関連入居施設，介護支援専門員，ケアマネジメント

【目的】A 地域における高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情について明らかにする。

【方法】高齢透析患者の介護関連入居施設入所に携わった介護支援専門員 9 名に半構造化面接を実施し質的帰納的に分析した。

【倫理的配慮】研究対象者には、研究目的・方法・内容、匿名とすること、自由意思による研究への参加、公表等について文書と口頭で説明し同意を得た。なお、本研究は新潟県立看護大学倫理委員会（承認番号：022-09）および学長の承認を得て実施した。

#### 【結果】

##### 1. 研究対象者および語られたケアマネジメント事例の概要

研究対象者 9 名は、介護支援専門員歴 2.5～20 年であった。語られた高齢透析患者事例の年齢は 70～90 代、介護度は要介護 1～要介護 5 であった。入所した介護関連入居施設は、ショートステイ 6 名、サービス付き高齢者住宅 2 名、施設入所なし 1 名であった。インタビュー時間は平均 47 分±10 分であった。

##### 2. 高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情

高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情について、データ分析から 444 コードが抽出された。ケアマネジメントの経験として、『介護関連入居施設入所の調整』『介護関連入居施設との連携』『透析医療機関との連携』『行政機関との連携』『透析患者家族との連絡』が生成され、《医療依存度、介護度の高さにより施設入所が困難となる現状の確認》など透析患者という理由で入所できないケースを多く経験していた。経験を通して、介護支援専門員は『介護関連入居施設入所のケアマネジメントでの苦労・困りごと』『透析患者の介護関連入居施設入所のケアマネジメントに関する介護支援専門員の意向』等、《介護関連入居施設が透析患者を積極的に受け入れて欲しいという思い》などの心情を抱いていた。

#### 【考察】

高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情において、介護支援専門員は、透析患者という理由で入所を断られるケースを経験しており高齢透析患者の介護関連入居施設入所のケアマネジメントの大変さを感じていた。A 地域において高齢透析患者を受け入れる介護関連入居施設は少なく、入所施設を選定する際は通院時の送迎や介護関連入居施設の職員の協力・理解がないと入所できない場合も多いことが明らかとなった。透析医療機関の看護としては、介護支援専門員と連携し透析医療機関が可能な範囲で送迎に協力できるよう体制を整えること、入居中の介護関連入居施設透析患者の管理について透析医療機関から指導をすることで透析患者への理解を深める働きかけを行うことや行政機関と連携して透析患者への知識を深めてもらえるような勉強会の実施・パンフレット作成など透析患者への理解の普及を担う必要があると考える。高齢透析患者の介護関連入居施設入所に関係する全ての業種のネットワーク作りと協力体制を作り、高齢透析患者がスムーズに介護関連入居施設に入所できるような地域包括ケアシステムの構築の必要性が示唆された。

#### 【結論】

A 地域における高齢透析患者の介護関連入居施設への入所に関する介護支援専門員のケアマネジメントの経験と心情について、介護支援専門員は、介護関連入居施設、透析医療機関、行政機関と情報交換・連携を図りながら、高齢透析患者・家族が望む形に近い状態で入所できるように働きかけを行っていた。ケアマネジメント経験を通して、透析患者という理由で入所できないケースを多く経験し、高齢透析患者の入所を受け入れる介護関連入居施設が増えて欲しいという思いや、介護関連入居施設の問題を整理する必要性、透析医療機関と介護関連入居施設間の送迎問題に対する対策や高齢透析患者がスムーズに介護関連入居施設に入所できるような地域包括ケアシステムの構築への願い等の心情が明らかとなった。

本研究は、2024 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

身体抑制の低減に向けた実践  
～看護師の年代別インタビューによる課題分析を踏まえた介入をとおして～

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：関 真和 長岡赤十字病院

2. 研究分担者氏名

山崎 依美里 (所属：長岡赤十字病院)

3. 学内責任者

新潟県立看護大学 原 等子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需要費	合計
	0	0	0	38,278	38,278

5. 研究成果の公表

身体抑制低減に向け調査を行い各年代でニーズを抽出し具体的介入をした結果、身体抑制実施数が減少し身体抑制に対する意識変化が生じた。この研究は2023年度長岡赤十字病院看護研究発表会で発表予定である。

## 身体抑制の低減に向けた実践 ～看護師の年代別インタビューによる課題分析を踏まえた介入をとおして～

発表者：関 真和、共同研究者：山崎 依美里

学内責任者：原 等子

所属施設：長岡赤十字病院

キーワード：身体抑制、アクションリサーチ、抑制低減、カンファレンス

【目的】病棟看護師が身体抑制に対してどのような意識を持っているか年代別の課題を明らかにし、その課題に応じて身体抑制実施率の減少に向けたアプローチを行い、身体抑制低減の意識変化と抑制実施状況の変化を明らかにする。【方法】令和4年4月～令和5年3月を研究期間とし、当院A病棟で勤務する看護師35名とA病棟の入院患者を対象とした。調査方法は抑制に関する意識調査として介入前後での事前・事後アンケートを実施した。内容は抑制低減について5段階(非常にそう思う～全くそう思わない)尺度、身体抑制の種類11項目に応じた実施時の抵抗感の度合を7段階(0:全く感じない 1:ほとんど感じない 2:あまり感じない 3:どちらともいえない 4:やや感じる 5:感じる 6:非常に感じる)尺度、身体抑制の実施・継続・解除の判断基準として「年齢」「既往歴」「経緯」「経験」「アセスメント」「フローチャート」「カンファレンス」を示し、どの程度重要視しているか5段階(0:重視していない 1:あまり重視していない 2:どちらともいえない 3:時々重視している 4:とても重視している)尺度で示し回答を求めた。また「5年未満」「5～14年」「15年以上」と経験年数を分類し回答者へ該当する年数を回答してもらった。フォーカスグループインタビューは3つの年代別で分け、1グループ4名で行なった。抑制解除困難な場面など聞き取り調査を実施し、身体抑制実施を判断する要因別にカテゴリー・サブカテゴリー化を行なった。抑制実施状況の定点調査は、入院患者の中で抑制実施状況の経時的把握を実施した。介入前後での変化を捉えるため、介入前後ともに8日間行った。具体的介入は①カンファレンス方法の変更②5年未満のスタッフへ認知症基礎知識とせん妄についての伝達講習③15年以上のスタッフへ他施設での抑制低減に向けた取り組みの資料配布を行なった。【倫理的配慮】長岡赤十字病院看護部研究倫理委員会の承認を得て実施し、研究対象者には自由意志であることなど文書で説明した(番号2022-1-②)【結果】介入前・介入後アンケート：抑制低減について「少し思う」56.3%であり、介入後アンケートは「非常に思う」16.7%、「少し思う」58.3%と増加した。「どちらともいえない」は減少した。身体抑制種類に応じた実施時の抵抗感は、「体幹抑制」が最も抵抗感が高く、「ミトン」「上肢・下肢抑制」も比較的高かった。一方で「壁寄せ」が最も抵抗感が低く、「転倒むし®」「センサーマット」「ベッドセンサー」も比較的低かった。判断基準は、「既往歴」を最も重要視しており、次いで「カンファレンス」「年齢」の順であった。「フローチャート」が最も低く、「経験」「アセスメント」が次いだ。フォーカスグループインタビュー：5年未満は「経験・知識不足から抑制の必要性についてアセスメントが困難」「有効なカンファレンスが行えていない」が挙げられ、15年目以上は「抑制をするときの思い」「抑制解除に踏み切れないジレンマ」「カンファレンスで抑制に関する検討が不十分」が挙げられた。なお業務調整などの関係で5～14年目へ実施できなかった。抑制実施状況の定点調査：抑制実施率は介入前24.1%、介入後18.9%と5.2%減少した。実施件数は介入前123件、介入後75件と減少した。介入後の種類別での実施件数は「4点柵」のみ増加し、実施率は「4点柵」「ベッドセンサー」が増加した。【考察】介入前アンケートとフォーカスグループインタビューから身体抑制を減らしたい思いはありながら、様々な理由から抑制解除の困難さを抱えていた。各年代での抑制解除に対するニーズを抽出し具体的介入を実施したことにより、抑制低減に対するスタッフの意識変化が生じ、抑制実施率・実施件数ともに減少へ繋がった。しかし実施率・実施件数が増加した抑制の種類もあり、意識調査でも「どちらともいえない」16.7%と回答しており抑制解除への難しさは依然としてある。今回の介入による変化も見られており、フォーカスグループインタビューで語られた内容を活かしながら定着に向けた継続的取り組みが重要である。【結論】身体抑制解除の難しさやジレンマを抱えており、抑制低減につながらない現状を明らかにした。スタッフのニーズに則した介入により身体抑制低減に対する意識と身体抑制実施状況に変化が生じた。一連の介入が一定の有用性があるとともに、継続的取り組みによる定着が求められる。【利益相反】報告すべきCOIはない。本研究は、令和4年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

新型コロナウイルス感染症専用病棟に勤務する看護師が感じている身体的・精神的影響に関する実態調査

1. 研究代表者及び所属

代表者名：米持 純子 新潟県立中央病院

2. 研究分担者氏名

宮腰 理絵（所属：新潟県立中央病院）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学 岡村 典子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	99,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	3,640	11,952	15,592

5. 研究成果の公表

第 55 回 日本看護学会学術集会にて発表を計画している。

# 新型コロナウイルス感染症専用病棟に勤務する看護師が感じている 身体的・精神的影響に関する実態調査

米持 純子<sup>1)</sup>, 宮腰 理絵<sup>1)</sup>, 岡村 典子<sup>2)</sup>

1) 新潟県立中央病院 2) 新潟県立看護大学

キーワード：コロナ専用病棟 看護師 身体的影響 精神的影響

【目的】A病院では、新型コロナウイルス感染症(以下、コロナ)の流行に伴い、2020年5月から、一般病棟をコロナ専用病棟(以下、専用病棟)へ体制変更し、所属する看護師は専用病棟での勤務に加えて他病棟への応援にも従事している。専用病棟の看護師は、院内感染を発生させないことを最優先する中で、自身の感染の危険を感じながらも、患者に寄り添った看護が提供できるよう従事している。しかし、暴露対策の制限により患者のニーズに沿った看護ケアを十分に行えず、ジレンマを感じることもある。また、長時間の个人防护具着用(以下、PPE着用)による身体症状についての声もスタッフから多く聞かれている。既に、コロナ患者に関わる医療従事者の身体的・精神的影響に関する研究は報告されているが、A病院での現状は明らかにされていない。そこで、患者が安全な看護サービスを受けられるようスタッフの身体的・精神的影響に関して明らかにすることとした。

【方法】研究の対象は、コロナ患者の看護に携わった経験のある看護師とした。データ収集方法は、半構成的質問紙を用いて実施し、コロナ患者の看護に携わる中で感じている身体的・精神的影響について調査した。調査内容は、対象者の背景、専用病棟勤務における周囲からの理解、PPE着用の時間、身体的不調の有無、専用病棟での嬉しかったこと、よかったこと等である。データ分析方法は、数値化できる項目は単純集計を行い、自由記載の項目は意見内容ごとに分類した。倫理的配慮は、研究への参加は自由意思であること、質問紙は無記名であること、得られた内容は本研究以外には使用しないこと等を文書及び口頭で説明した。なお、所属機関の倫理委員会に提出し承認を受けて実施した。

【結果】対象者39名中23名より、質問紙の回答が得られた(回収率59%、有効回答率100%)。看護師の経験年数としては10年以上が70%を占めており、専用病棟での経験1年未満が約半数であった。周囲からの理解について、78%が「得られた」と回答した。PPE着用の最長時間については全員が2時間以上と回答し、96%が感染対策を負担と回答した。身体的不調の有無は「ある」が57%で、頭痛、疲労感、めまい、睡眠障害、イライラ、暴飲暴食等の回答があった。また、専用病棟の勤務の中で65%が「良かったこと、嬉しかったことがある」と回答し、“感染拡大を防止するという目標が明確で一体感を感じる”等の記載があった。

【考察】看護師としての経験年数は10年以上が7割を占めているが、9割以上が感染対策に対して負担であると回答し、身体的不調ではセリエ(1988)が提唱したストレス反応に該当する症状がみられていた。コロナ患者に対する看護は初めての経験であること、長時間のPPE着用などが身体的不調や精神的影響への一因となっていることが示唆された。また、このような隔離禍での看護に対してジレンマを感じながらも、感染拡大防止という明確な目標を持ち協働して乗り越えたことが看護師としての学びや成長、やりがいに繋がったと考える。また、その中で仲間や周囲からの理解や労いが大きな力になっていたと言える。

【結論】専用病棟に勤務する看護師は、コロナ患者に対する感染対策という初めての経験の中で身体的不調や精神的負担を感じつつも、感染拡大を防止するという明確な目標を持ち仲間と協働することにより学びや成長、そしてやりがいに繋がっていたことが示唆された。

【引用文献】ハンス・セリエ(1988), 現代社会とストレス, 法政大学出版局。

・利益相反：令和4年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

A 病院壮年期女性看護師の骨密度と骨粗鬆症に関連した  
知識、生活習慣に関する実態調査

1. 研究代表者及び所属

研究代表者：吉村 登紀恵 新潟労災病院

2. 研究分担者氏名

高沢 ひろ江（所属：新潟労災病院）

3. 学内責任者

新潟県立看護大学 酒井 禎子

4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	43,110	0	0	6,287	49,397

5. 研究成果の公表

2024 年度の院内の報告会で発表予定である。



## A 病院壮年期女性看護師の骨密度と骨粗鬆症に関連した知識、生活習慣に関する実態調査

研究者名：吉村登紀恵、高沢ひろ江

所属施設名：新潟労災病院

学内責任者：酒井禎子

キーワード：骨粗鬆症 骨密度 壮年期女性看護師 知識 生活習慣

### 【目的】

同意を得られた A 病院の女性看護師を対象にアンケート調査を行い、40～50 歳代女性看護師の骨密度と知識、及び骨密度に関連する生活習慣の実態を明らかにする。

### 【方法】

- 1) 対象：A 病院に勤務する 40～50 歳代の女性看護師
- 2) データ収集方法：自記式質問紙を用いて、骨密度やその関連因子と考えられる FRAX 測定項目並びに骨粗鬆症に関する知識や生活習慣（食生活および運動習慣）について調査した。
- 3) 分析方法：Excel を用いて記述統計を行うとともに、目的変数を大腿骨の骨密度および腰椎の骨密度、説明変数を BMI、年齢、カルシウム摂取量、知識ならびに運動習慣（1 週間における 1 時間以上の運動回数）として単回帰分析を行った。
- 4) 倫理的配慮：アンケートは無記名で行い、回答は自由意思であることを文章で説明するとともに、研究協力への同意チェック欄にチェックがあった回答用紙を分析対象とした。また、本研究は、新潟労災病院の看護部の倫理委員会の承認を得て行った。

### 【結果】

80 名の女性看護師にアンケートを配布し、34 名（回答率 42.5%）から回答を得た。年代は 40 歳代が 16 名、50 歳代が 18 名であった。適正体重 BMI22 に満たない BMI 低値の看護師は 21 名（62%）であった。骨密度測定値の記載があった 22 名のうち骨粗鬆症と診断される数値 YAM70%以下を示したのは 2 名、要注意とされる 70～80%が 7 名、健常とされる 80%以上が 13 名であり、骨量減少群（YAM80%未満）は 40 歳代 4 名、50 歳代 5 名であった。知識を問う設問での正答率は、治療率に関する設問で 79%、椎体骨折に関する設問で 82%であり、他の設問では 90%以上だった。カルシウム摂取量では、充分足りている（20 点以上）1 名、少し不足（16～19.5 点）が 3 名、不足群（15～0 点）が 30 名、その中でも骨粗鬆症ガイドラインの推奨量 800mg の半量 400mg 以下の人たちが 15 名（44%）だった。BMI、年齢、カルシウム摂取量、知識ならびに運動習慣に関して、大腿骨の骨密度および腰椎の骨密度との単回帰分析を行ったところ、20 代、小学生時の運動習慣と大腿骨の骨密度に有意な関連が認められ、共に運動回数の多いほうが大腿骨の骨密度が高かった（ $p<0.05$ ）。また、30 代、20 代の運動習慣と腰椎の骨密度に有意な関連が認められ、同じく共に運動回数の多いほうが腰椎の骨密度が高かった（ $p<0.05$ ）。

### 【考察】

骨密度測定値の記載があった 22 名のうち骨量減少者が 9 名おり、その中でも原発性骨粗鬆症と診断される YAM70%以下の該当者が 2 名あり、壮年期の看護師の骨量減少者が多いことが明らかとなった。20 代、30 代の運動習慣が現在（壮年期）の骨密度に影響していたことから、成長期に獲得した最大骨量を壮年期に維持するためには、20～30 代の運動習慣が重要であるといえる。骨粗鬆症に対する知識は高い集団であったが、食生活においてカルシウム摂取量が不足している現状も見受けられることから、予防のための生活習慣の改善に繋がるような働きかけが必要である。

### 【結語】

A 病院壮年期女性看護師には骨量減少者が多く、若年期の運動習慣と骨密度に有意な関連があることが明らかになった。若年期から生活習慣の改善につながるような働きかけの重要性が示唆された。

### 【謝辞】

本研究にあたり分析のご指導を頂きました新潟県立看護大学永吉雅人准教授に感謝申し上げます。

### 【利益相反】

2022 年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した

## 確認不足を発生要因に含むインシデントレポートの分析と対策

### 1. 研究代表者及び所属

研究代表者：高橋恵美 新潟厚生連上越総合病院

### 2. 研究分担者氏名

金井裕美（所属：新潟厚生連上越総合病院）

小関千鶴（所属：新潟厚生連上越総合病院）

風間龍宏（所属：新潟厚生連上越総合病院）

### 3. 学内責任者

新潟県立看護大学 伊豆上 智子

### 4. 研究助成金執行報告

(円)

予算額	100,000 円				
執行額	旅費	報償費	役務費	需用費	合計
	0	0	0	37,618	37,618

### 5. 研究成果の公表

令和4年度院内看護研究発表会で「確認不足を発生要因に含むインシデントレポートの分析」として発表する。

## 確認不足を発生要因に含むインシデントレポートの分析と対策

高橋恵美<sup>1)</sup> 金井裕美<sup>1)</sup> 小関千鶴<sup>1)</sup> 風間龍宏<sup>1)</sup> 伊豆上智子<sup>2)</sup>

1)新潟厚生連上越総合病院 2)新潟県立看護大学

キーワード: 確認不足, インシデント, 医療安全

【目的】確認不足に関するインシデントレポートを分析して要因を明らかにし、確認不足の発生を防ぐ対策を実施して、看護師の確認行動の変化を把握することである。

【方法】分析対象は、2021年4月1日から2022年3月31日までにA病棟で看護師が提出したインシデントレポート119件から、事故原因の要因の発生要因と自由記載欄に確認不足があった記述のあるインシデントレポートを研究実施者4名と医療安全管理者が選出した。選出したインシデントレポートから看護師経験年数、直前の患者の状態、事例の種類（インシデントの種類：薬剤、輸血、治療・処置・手術、ドレーン・チューブ、検査、療養上の世話、医療機器等、転倒・転落、暴言・暴力、診療情報、針刺し・感染、クレーム、接遇・対応、その他）を収集して項目別に単純集計し、事例の内容（自由記載欄の「確認不足が要因と思われる記載」）は、記載内容の類似性と相違性に注目してカテゴリー化し、カテゴリーに含まれる自由記載の数を集計した。分析結果から明らかになった確認不足の要因の発生を防ぐ対策を検討してA病棟の看護師に3週間実施し、アンケートを用いて確認行動に関する変化を評価した。

【倫理的配慮】「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を遵守し、所属施設の倫理委員会の承認を得た。インシデントレポートは、患者や看護師を含む医療従事者個人の特定につながる情報が除外された状態であることを、複数の研究実施者が確認した。

【結果】分析対象として選出したインシデントレポート77件を分析し、看護師経験年数はすべての年代で発生していた。直前の患者の状態は「特になし」45件、次いで「認知症・健忘」13件だった。発生時間帯は「12:00～13:59」19件、次いで「20:00～21:59」10件だった。事例の種類は「薬剤」34件、次いで「転倒・転落」20件だった。事例の内容を回答した自由記載から【思い込み】【慌てていた】【疑問に思わなかった】【多重業務】【患者のアセスメント不足】【コミュニケーションエラー】【知識不足】の7つのカテゴリーが抽出された。分析結果から、薬剤のインシデントに6R（正しい患者、正しい薬剤、正しい目的、正しい用量、正しい方法、正しい時間）の確認行動が実施できていない状況に注目した。その対策として、確認行動の変容を図る目的で6Rカードを作成し看護師24名に配布して、確認行動の変化があったかアンケート調査した結果、「以前より確認行動を行うようになった」13名、「特に変化なし」7名であった。

【考察】インシデントレポートに報告された確認不足の事例から、看護師や患者の特徴は見出せなかった。事例の種類では、薬剤に関連するインシデントが39件のうち19件であった。薬剤に関連する業務は確認を要する内容が多数あり、確認不足を背景とした事例が多いと考える。業務が重なる多忙な時間帯に発生件数が多かったことと、確認不足の要因カテゴリーに【多重業務】、【慌てていた】があることから、多忙な環境下で確認不足によるインシデントが起こりやすいと考えられる。また、確認不足の要因カテゴリー【思い込み】【疑問に思わなかった】から、日常的に繰り返し行っている業務への慣れから無意識の行動をとりやすいために、確認行為を省いてしまう状況がうかがわれる。本研究では、確認不足の発生を防ぐ対策としてB病院の看護部業務基準に説明されていた6Rを、個々の看護師の確認行動に活用できるようにカード化して配布した。カードサイズで携行できるようになったことで、6Rに基づく確認行動が意識しやすくなり、確認行動の実施につながった。

【結論】確認不足の要因として、多忙な環境や業務への慣れなどから確認行動が省略されていることがわかった。確認行動を省略しないように、6Rを意識した確認が実施できるよう定期的に促す必要がある。

本研究は、令和4年度新潟県立看護大学看護研究交流センター地域課題研究助成を受けて実施した。

令和5年度  
公立大学法人新潟県立看護大学  
看護研究交流センター 活動報告書

令和6年6月 発刊

発行 公立大学法人 新潟県立看護大学 看護研究交流センター  
〒943-0147 新潟県上越市新南町 240 番地  
TEL・FAX 025-526-2822